An Annotated Translation of *Yi jie Xiao lin guang ji, 6*

Yosuke KAWAKAMI
Center of Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering

ぷりの評語が加えられている。いずれも、「このような藪医者（やぶいしゃ）の手にかかったら、間違いなく命はない。」という意味である。

（附記）
本稿は、令和元年度科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号一七K〇二四五六「東アジアの笑話と日本語・日本文学に関する複合的研究」）による研究成果の一部である。

「漢方薬のビャクキョウサンですよ。」
お客さんは、言った。
「漢方薬のビャクキョウサンが、なんで生きているんだよ。」
「つまり、わしの薬を食べたっちゅうことやろ。」
（編者のコメント）薬箱の中にこそ、却って「生命力」（＝「ビジネスチャンス」）が宿っている、ということである。
【訳者注】「編者のコメント」に見える「生意［shēngyi］」という語は、「生命力」という意味と、「商売（ビジネス）」という二つの意味をもつ掛詞となっている。

『絶纓三笑』第一三九話（巻二、時笑・舛語四九、万暦四四年（一六一六）序、東京大学文学部蔵本、二七丁裏～二八丁表）

殪蠶

人家延醫至。**啟**廂取藥。則滿廂皆有蛀蟲。［蓋久閉不開也］主人指蟲問曰。此何物。曰殪蠶。主人曰殪蠶如何活的。醫曰他吃我的藥耳。
殪者食之而能活活者食之而能殪醫家眞是造化在手。

漢方薬のビャクキョウサン

ある人に招かれて、医者がやって来た。（医者が）箱を開けて、薬を取り出そうとしたところ、箱の中いっぱいに、木食い虫がウヨウヨしていた。［長い間、薬箱を閉めっぱなしにして、蓋を開けなかったのであろう。］（割注）
主人は、その虫を指さして、「これは何なんだよ。」と訊いた。すると医者は、「漢方薬のビャクキョウサンです。」と言った。（それを聞いて）「漢方薬のビャクキョウサンが、なんで生きてるんだよ。」と訊ねると、医者は言った。「漢方薬のビャクキョウサンが、わしの薬を食べたというだけのことじゃろが。」
（編者のコメント）死んで干からびたものが薬を食べて生き返ると言うならば、生きている者がこの薬を服用したら、死んで干からびるということであろう。医者というものは、まことに造物主の如き力をその手に秘めているのである。

『笑府』第一四一話（巻四・方術部、泰昌元年（一六二〇）頃成立か、筑波大学中央図書館蔵本、四丁表）

殪蚕

一醫甚無生理。忽求藥者至。開箱取藥。中多蛀虫。人問此何物。曰殪蚕。又問殪蚕如何是活的。曰。喫我藥耳。
只怕人喫了。倒做了殪蚕

和刻本『刪笑府』第六七話（大本、風来山人（平賀源内）施訓、明和六年（一七六九）序、一七丁表～裏）

殪蚕

一リノ醫甚タ無二生一理一。忽チ求レル藥ヲ者ノ至ル。開テ箱ヲ取レ藥ヲ。中多ク蛀一虫。人問。此レ何一物ソ。曰。殪一蚕。又問。殪一蚕如一何ソ是レ活的。曰ク。喫スルノミ我ガ藥ヲ耳

余説

またしても、藪医者を馬鹿にした話である。
薬箱の中に虫が湧いているのを見られてしまったため、それはウジ虫の類ではなく、死んだカイコを乾燥させた漢方薬のビャクキョウサンが、わしのすばらしい薬を食べて、生き返ったのであろうと、藪医者が下手な言い訳をした、という話である。
『笑府』所収の類話には、「只怕人喫了。倒做了殪蚕（人間がこの薬を服用した場合、逆に死んだカイコになってしまうのではなかろうか。）」というコメントが附されており、同じく『絶纓三笑』には、「殪者食之而能活、活者食之而能殪、醫家眞是造化在手」（死んで干からびたものが薬を食べて生き返ると言うならば、生きている者がこの薬を服用したら、死んで干からびるということであろう。医者というものは、まことに造物主の如き力を、その手に秘めているのである。）という、やはり気の利いた、嫌味たっ

突然お客さんがやって来て、「薬をくれ。」と言った。そこで、箱を開けて、薬を取り出そうとしたところ、箱の中には木食い虫がいっぱい集っていた。お客さんは（それを見て）、

「これは何なんだよ。」

と訊ねた。医者は言った。

「漢方薬のビャクキョウサンですよ。」

【訳者注】「ビャクキョウサン」は、白僵菌に感染して死んだカイコを乾燥させた漢方薬。長さ二～五㎝。幼児性てんかんの発作などに効くとされた。

お客さんは、また訊いた。

「漢方薬のビャクキョウサンが、なんで生きているんだよ。」

医者は、答えて言った。

「それはおそらく、わしの薬を食べて、生き返ったんじゃろう。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・術業部（二五丁表～裏）。『新鐫笑林広記』巻之三・術業部（第一六八話、六丁表～裏）。○殭蚕［jiāngcán］＝漢方薬「ビャクキョウサン（白僵蚕）」「おしゃり」のこと。『神農本草経』（嘉永七年（一八五四）和刻、巻中・一二丁表）には「白彊蚕」と見える。和刻本『訳解笑林広記』本文中の「殭蚕」には「オシヤリ」という左訓が附されている。「殭［jiāng］」は「死後硬直」の意。現代中国語では「僵」と表記される。「殭蚕」は、白僵菌（ムスカルジン）の感染によって死んだカイコガ科カイコの幼虫の体を乾燥させた漢方薬。長さ二～五㎝、直径四～七㎜。子どものてんかんの発作や幼児の夜泣きを抑えたり、道教で人間の体内に宿って害をなすとされる「三虫」「三尸」を追い払う効果があるとも考えられた（『神農本草経』）。なお、現代漢方医学でも鎮痛薬として用いられる。○生理［shēnglǐ］＝商売の意（古白話）。現代中国語「生意［shēngyi］」と同じ。左訓「シヤウバイ」（商売）。○蛀虫［zhùchóng］＝書物・衣服・穀物などに集る小さな虫。木食い虫。「蠹虫［dùchóng］」とも言う。左訓「ムシ」（虫）。○又問殭蚕如何是活的＝（薬を買いにきた客は）漢方薬のビャクキョウサンがどうして生きているのですかと重ねて質問した、という意味。和刻本は「又ヲ問フ殭蚕如何セハ是レ活キルヅ的」とするが、今、中国原本（乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊、京都大学附属図書館本）に拠り、句読の位置および「殭」字を「殭」に改めた。○怕他不活［pà tā bù huó］＝「怕［pà］」は、原義は「恐れる」「怖がる」だが、ここは反語表現。「（虫が生き返らない）などという心配をする必要があろうか、いや、そのような心配はいらない」＝「木食い虫が生き返らないわけがない。」という意味。左訓「イキヌト云キツカヒハナイ」（生きぬと云ふ気遣ひはない）。

補注

この話は、中国笑話集『笑林評』（第一二五話）、同『絶纓三笑』巻二時笑・舛語四九（第一三九話「殭蠶」）、同『笑府』巻四（第一四一話「殭蚕」）に類話があり、和刻本『刪笑府』（大本）第六七話「殭蚕」に、風来山人（平賀源内）の訓訳を附した『笑府』本文が収録されている。

『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』および和刻本『刪笑府』の原文は、以下の通りである。内容は同じだが、中国刊本の文章は、それぞれ少しずつ異なる。『笑林評』『絶纓三笑』には、拙訳を添える。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』（岩波文庫、一九八三年一月、一三六頁）を参照。

『笑林評』第一二五話（内題「笑林評巻之上」、外題「笑林評　上」、万暦三九年（一六一一）序、国立公文書館（内閣文庫）蔵本、四七丁表）

一醫甚無生理。忽求藥者至　開箱取藥。中多蛀虫。人問。此何物。答云殭蠶。其人曰。殭蠶如何活的。曰喫我藥耳。

藥籠中。却有生意。

ある医者、まったく商売あがったりであったが、突然「薬をくれ。」と言うお客さんがやって来た。箱を開けて薬を取り出そうとしたところ、中には木食い虫がいっぱい集っていた。お客さんは、

「これは何なんだよ。」

と訊ねた。（医者は）答えた。

と死んだ子どもを取り出して、それを見せながら言った。「もしもこんな感じの痘瘡じゃったら、もう治せないからな。」○また、次のような話も伝わっている。薬の処方を誤って、子ども死なせてしまったので（その責任を取って、子どもの遺体を）袖の中に入れて連れ帰り、納棺から埋葬まで（一切の）葬儀を行うことを約束した。その家の人は、召使いに命じて、医者の後をつけさせた。橋の上までやって来ると、突然（医者は）死んだ子どもを取り出して、川に投げ捨てた。召使いは言った。「なんで投げ捨てるんじゃあ。」医者は「違いますよ。」と言いながら、左の袖を上に挙げて、こう言った。「あんたのうちの分は、ほれ無事じゃわい。」愚、案ずるに、最近の医者は、皆、見識は狭いくせに、その薬箱は馬鹿でかく、その袖の下ときたら、専ら納棺と埋葬のためだけに用いられているようなものである。

『笑府』第一三七話（巻四・方術部、泰昌元年（一六二〇）頃成立か、筑波大学中央図書館蔵本、三丁表）

又（包殯殮）

有醫死人兒。許以袖囲殯殮者。其家恐見欺。命僕隨之。至橋中。忽取死兒擲諸河。僕怒曰。如何抛了我家小舍。醫曰。非也。因舉左袖曰。汝家的自在

和刻本『笑府』第二三話（半紙本、明和五年（一七六八）九月京都刊、京都大学附属図書館蔵本、巻上、六丁表）

有下醫死二人兒一許スニ以二テ袖ニシ回リ殯一殮スルヲ者上其ノ家恐レ見レ欺カ命レ僕ニ隨シム レ之 至二橋中一ニ 忽取二死兒一ヲ擲ツ諸河一ニ 僕怒テ曰 如一何シッ抛二了我家小舍一ヲ 醫ノ曰 非也 因舉二左袖一ヲ曰 汝カ家ノハ的自在リ

余説

例によって、医療ミスで子どもを死なせてしまった医者が責任を取って葬儀を執り行おうとする話だが、今回の話は、この藪医者、葬儀を執り行うと約束したはずの子どもの遺体を川に投げ捨てたのかと思ったら、それは別の子の遺体でしたという、笑うに笑えぬ、恐ろしい話である。

「小児科［xiǎo'érkē］」という言葉は、現代中国語でも、けちくさくて取るに足りない存在を言う罵語の一つだが、明清時代の中国においても、通常の医者以上に藪医者が多かったと思われる。このように、次から次へと、医療ミスによる乳幼児の死亡事故が実際に多発していたであろうことは、想像するに難くない。そして、袖の中にすっぽり収まる子どもの遺体というのは、間違いなく幼気な赤ちゃんだったはずである。

この話は、数限りない乳幼児の命を奪い、さらにはその遺体を丁重に埋葬すると請け負っておきながら、人の見ていないところでは、殺した子どもの遺体を情け容赦なく投げ捨てていたという、世にも残酷な「小児科」医師たちの悪行三昧を笑い飛ばそうとしたものである。現代人には、楽しく笑うことのできない話だが、『絶纓三笑』『笑府』『笑林広記』に収録されたいずれの文章も、そのタッチは軽やかで明るい。

⑲殭蚕（漢方薬ビャクキョウサン）

原文

殭蚕

一醫久ク無二生理一。忽チ有リ求レ藥ヲ者ノ至ル。開テ箱ヲ取ル藥ヲ、中ニ多シ蛀虫一。人問フ此レハ是レ何ニ物ソ。曰ク殭蚕也、又タ問フ殭一蚕如何セハ是レ活キルヅ的。荅テ曰ク。吃二了セバ我的ノ藥一。怕ニ他ノ不一レ活、イキヌト云

書き下し文

殭蚕

一医 久く 生理 無し。忽ち 薬を 求る 者の 至る 有り。箱を 開て 薬を 取る、中に 蛀虫 多し。人 問ふ 此は 是 何物ぞ。曰く 殭蚕なり、又 問ふ 殭蚕 如何せば 是 活きるぞ。答て 曰く。我の 薬を 吃了せば。他の 活きざるを 怕んや、

現代語訳

あるお医者さん、（まったく患者が来なくなり）長らく商売あがったりであったが、

を納棺し、墓地に埋葬すること」「葬式」の意（第七五話「擡柩」に前出）。左訓「ウケアフテ ソウレイスル」（請け合ふて、葬礼する）。○許［xǔ］＝…することを承諾し、約束する、という意味。○擲［zhì］＝投げつける、投げ捨てる。○抛［pāo］＝放り投げる、投げ捨てる。「擲［zhì］」とほぼ同じ意味。左訓「ウチヤル」（打ち遣る）。○小舍［xiǎo shè］＝お坊ちゃま、御令息、若君。高貴な家柄の子息のこと。「小舍人」「舍人」とも言う。『儒林外史』第二回に「他家顧小舍人去年就中了學」（顧の坊っちゃまは去年秀才（生員ともいい、県学の学生の意）に合格なされた。（稲田孝訳『儒林外史』、平凡社、中国古典文学大系43、一九六八年一〇月、一六頁））とある。左訓「オムスコ」（御息子）。○你家的在這裏＝あなたの家の（子どもの遺体）は、ここにあります。左訓「ソチラノ、ハ コ、ニアル」。

補注

この話は、『絶纓三笑』巻一時笑・澹語五七（第五七話「包殯」）、『笑府』巻四（第一三七話「又（包殯殮）」）に類話があり、『笑府』所収の本文は、和刻本『笑府』（半紙本、明和五年（一七六八）九月京都刊）に収録されている。

『絶纓三笑』『笑府』および和刻本『笑府』（半紙本、明和五年（一七六八）京都刊）収録話の本文は、以下の通りである。『絶纓三笑』『笑府』『笑林広記』の三種は、いずれも内容も文章もほぼ同じだが、『笑府』が最後の一言を「汝家的自在」としているのに対し、『絶纓三笑』は「你家的自在」、『笑林広記』は「你家的在這裏」としている程度の違いがある。

なお、『絶纓三笑』所収話は、「包殮」という話の二つ目の類話（「或曰」）として紹介されているものである。『絶纓三笑』については、全文の拙訳を載せておく。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』（岩波文庫、一九八三年一月、一三四頁）を参照のこと。

『絶纓三笑』第五七話（巻一、時笑・澹語五七、万暦四四年（一六一六）序、東京大学文学部蔵本、三〇丁裏～三一丁表）

包殮

一幼醫醫死人兒。兒家詬罵不已。醫許以帶歸殯殮。因納兒于藥廂中。中途。又遇一病家邀去。啓廂用藥。誤露死兒。病家驚問。對曰。這是我帶去包活的

一說痘科醫痘兒而死。卽向兒家乞其死兒置藥廂中遇人家請看痘卽取出死兒示之曰若是似這樣的痘就醫不得的○或曰。醫死人兒。許以袖回殯殮。其家命僕隨之。至橋上。忽取死兒擲諸河。僕曰。如何抛了去。醫曰。非也。因舉左袖曰你家的自在　下士曰。近來醫家皆狹小其箱而廣大其袖專爲便于殯殮耳

葬儀を請け負う

ある小児科のお医者さん、薬の処方を誤って、子どもを死なせてしまった。家の人は、医者をさんざん罵倒した。そこで、お医者さんは、（子どもを死なせた責任を取って、子どもを自分の）家に連れ帰り、納棺から埋葬まで（一切の）葬儀を行うことを約束した。そこで、（医者は）子ども（の遺体）を薬箱の中に入れ（て、家に連れて帰ろうとし）た。すると、途中でまた、病人の家から、（子どもを診てほしいという）お呼びがかかった。（次の患者の家で）薬を取り出そうとして、箱を開けると、（箱の中に入れていた）子どもの遺体がちらりとはみ出してしまった。患者の家の人はびっくりして、これは何だと訊ねた。（医者は）答えて言った。

「これはですね、わたしが家に連れ帰って、生き返らせることを請け負ったものですよ。」

（編者のコメント）一説に、次のような話も伝わっている。天然痘の専門医が、痘瘡の子どもを治療していたところ、薬の処方を誤って、（子どもを）死なせてしまった。（医者は）すかさず、子どもの家の人に、その死んだ子どもを薬箱の中に入れさせてもらうようにお願いした。そのとき、たまたま痘瘡を診てほしいという人とばったり出くわしたので、パッ

余説

夫の留守中に四人も子どもができていた、というだけでも、それなりに可笑しな笑い話であろうが、この話は、その子どもたちの名前が、すべて薬種商の夫が商っている漢方薬の名前になっていた、というものである。

子どもたちに付けられた漢方薬の名前は、「宿砂」「遠志」「当帰」「茴香」の四種。「宿砂」には「（夫が）砂浜に宿をとっている」という意味を込めたと言い、「遠志」には「遠くにいる（夫を）恋しく想う気持ち（『志』）」を、「当帰」には「（夫が）当に帰るべし」という意味を、「「茴香［huíxiāng］」には「（夫がもうすぐ）家に帰る（『回郷［huíxiāng］』）」という「深い意味を込めた」などと妻は言う。

実際には、夫が家にいないのをよいことに、次から次へと浮気相手と関係を持ち、四人も子どもを作ったという、実は間違いなく不貞極まりない浮気女の下手な言い訳にすぎないのだが、このような妻の不貞行為の内実を知ってか知らずか、夫は最後に「自分がさらにあと何年も家を留守にしたら、もっともっと子どもたち＝漢方薬が増えて、薬局が一軒できてしまいそうだ」と言い放つ。この言葉は、その解釈により、二種類の味わい方が可能である。夫が妻の不貞に気づいているとすれば、それは浮気妻に対する辛辣な嫌味の表現であり、夫が妻の不貞に気づいていないとすれば、それは実に脳天気で鈍感な、寝取られ亭主の間の抜けた台詞となる。

そして、私見によれば、中国笑話の類型としては、後者の可能性が比較的高いように思われるが、この話の場合は、夫の放った最後の言葉「依你這等説来（お前の言う通りだとすればな）」という、不貞の妻に釘を刺しているかのようにも受け取れる、この微妙な一言が気にかかる。

ちなみに、『笑府』所収の類話には、夫のこの一言はなく、男はまるで漢方薬「敗亀板［bàiguībǎn］」のようではないかと、寝取られ亭主を痛烈に揶揄するコメントが附されている。「敗」は「ボロボロ」という意味であり、「亀」には「寝取られ亭主」という意味がある。つまり、『笑府』の話は、寝取られ亭主をからかう意図が明確に示されていると言えそうであるが、果たして『笑林広記』の方はどうであろう。

⑱包殯殮（葬儀を請け負う）

原文

包殯殮

有レ殯二死人一兒一。許二以袖一帰レ殯一殮ヲ。其ノ家恐レテ見レ欺カ。命シテ僕ニ随ハシム之ニ。至テ一橋上ニ、忽チ取テ兒一屍ヲ擲ス之ヲ河内一ニ。僕怒テ曰ク、如何ンソ抛二了ス我カ家ノ小舎ヲ一。殯曰ク。非也。因挙二左袖一ヲ曰ク。你カ家的ハ在テ這裏ニ。

書き下し文

殯殮を包ず

人児を医死する有り。許すに袖にし帰て殯殮するを以てす。其の家欺かれんことを恐て。僕に命じて之に随はしむ。一橋上に至て、忽ち児屍を取て之を河内に擲す。僕怒て曰く、如何ぞ我が家の小舎を抛了す。医曰く。非なり。因て左袖を挙て曰く。你が家の的は這裏に在り。

現代語訳

薬の処方を誤って、子どもを死なせてしまったので、（子どもの遺体を）袖に収めて家に帰り、（子どもを死なせた責任を取って）納棺から埋葬まで（一切の）葬儀を請け負うと（医者は）約束した。（子どもを失った）家の人は、（医者に）一杯食わされるのではないかと気が気でなかったので、召使いに命じて、医者の後をつけさせた。すると、ある橋の上までやって来たとき、突然（医者は）子どもの遺体を川の中に投げ込んだ。召使いは怒って、次のように言った。

「こらぁ、どうしてうちのお坊ちゃまを投げ捨てるんじゃあ。」

医者は、「違いますよ。」と言いながら、左の袖を上に挙げて、こう言った。

「あんたのうちの分は、ここにあります。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・術業部（二五丁表）。『新鐫笑林広記』巻之三・術業部（第一五八話、四丁表）。○包殯殮［bāo bìnliàn］＝葬式を請け負う、という意味。「包［bāo］」は「包」の正字（旧字）。「請け負う」「引き受ける」意。「殯殮［bìnliàn］」は「遺体

（眺めて）を附す。○該［gāi］＝「（道理から言って）～すべきである」という意味を表す助動詞。現代中国語「**应该**」と同じ。和刻本は、「合当」と同じく「マサニ～ベシ」と訓ませている。○**茴**香［huíxiāng］＝中国語では「回郷［huíxiāng］」（故郷に帰る）と同音。「**茴**」は「茴」の異体字。中国原本は「茴」に作る。四番目の子の名前としては「（父親がやっと）家に帰ってくる」という意味だが、この言葉は、同時に漢方薬の名前「ウイキョウ（茴香）」でもある。漢方薬「ウイキョウ（茴香）」は、セリ科ウイキョウ属の多年草。南欧・インド・中国東北部・朝鮮半島などの原産。消化を促進、血行を良くするなどの効用があり、冷え性の薬として用いられる。○依你這等説来＝あなたがそのように言うのであれば、あなたの言っていることに基づけば、という意味。「依［yī］」は、「依拠する」「基づく」意の動詞。「説」は「説」の俗字。「説来［shuōlái］」は、「言う」という意味の動詞「説［shuō］」に、話し手の側に話題の中心が近づいていく気持ちを加える方向補語「来［lái］」が付いたもの。和刻本は「你が這等に説に依り来れば」と訓んでいるが、「你が這等に説ひ来るに依れば」と訓読したほうがよい。左訓「サヤウニイヤレバ」（左様に言やれば）。○一爿［yì pán］＝一軒の。「爿［pán］」（日本漢字音は「ショウ」）は、中国南方の方言で、商店などを数える助数詞（量詞）。現代中国語「**间**［jiān］」に相当する。○開得一爿山薬舗了＝一軒の漢方薬の店を開くことができるだろう。「山薬」は「ヤマイモ」のことを言うが、ここでは「山薬舗［shānyàopù］」＝「山で取れる薬草で作った漢方薬を売る店」という意味で用いられているのであろう。中国語文献の用例未詳。左訓「クスリミセヲダスデアロウ」（薬店を出すであろう）。

補注

この話は、『笑府』巻九（第四一五話「薬名」）に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（下）』（岩波文庫、一九八三年二月、八六～八七頁）参照。また、和刻本『笑府』（半紙本、明和五年（一七六八）九月京都刊）第一三二話（下巻、八丁裏）、同『刪笑府』（大本、明和六年（一七六九）序、風来山人（平賀源内）施訓）第五八話「薬名」に、『笑府』所収話による本文と訓訳が掲載されている。

原本『笑府』、和刻本『笑府』、同『刪笑府』の本文は、以下の通りである。いずれも『笑林広記』とは、文章が異なる。

『笑府』第四一五話（巻九・閨風部、泰昌元年（一六二〇）頃成立か、筑波大学中央図書館蔵本、一一丁裏）

薬名

一人久客歸。妻已育三子矣。訝其何以不夫而孕。妻曰。思君之極。當是結想所成。故命名皆有深意。長曰遠志。想你出行也。次曰當歸。想你歸也。又次曰茴郷。想你回也。夫曰。我若再做幾年客。家裡開得一箇生藥舗了。

今正開生藥舗。足下亦是一物。問何物。曰。敗龜板。

和刻本『笑府』第一三二話（半紙本、明和五年（一七六八）九月京都刊、京都大学附属図書館蔵本、下巻、八丁裏）

一人久客歸ル 妻已ニ育ス三子ヲ矣 訝ル其ノ何ヲ以テ不レ夫ヲ而シテ孕ムヲ 妻ノ曰 思フレ君ヲ之極 當ニ是結想ノ所ニ成ス 故ニ命レ名ヲ皆有ニ深意一 長ヲ曰ニ遠志ト 想ニ你カ出ニ行ヲ也 次ヲ曰ニ當歸ト。想ニ你カ歸ヲ也 又次ヲ曰ニ茴香ト 想ニ你カ回ヲ也 夫ノ曰 我若シ再ヒ做ニ幾年ノ客ヲ 家ニ裡開ニ得ン一箇ノ生ニ藥舗ヲ了 或聞レ之ヲ曰 今正ニ開ニ生藥舗ヲ 足下モ 亦是一ニ物 問ニ何ニ物ト 曰 敗ニ龜ニ板

和刻本『刪笑府』第五八話（大本、明和六年（一七六九）序、風来山人（平賀源内）施訓、中野三敏先生蔵本、一四丁裏～一五丁表）

薬ニ名

一ニ人久客トシテ歸ル。妻已ニ育ニ三ニ子ヲ矣。訝ニ其ノ何ヲ以テ不レ夫ヲ而孕ムヲ妻ノ曰。思フレ君ヲ之極。當ニ是結想所レ成。故ニ命レ名ヲ皆有ニ深キ意一。長ヲ曰ニ遠ニ志ト 想フニ你ノ出ニ行ヲ也。次ヲ曰ニ當歸ト 想フニ你ノ歸ヲ也。又次ヲ曰ニ茴ニ郷ト。想フニ你ノ回ヲ也。夫曰ク。我若シ再ヒ做ニ幾ニ年ノ客ヲ。家ニ裡開ニ得ン一箇ノ生ニ藥ニ舗ヲ了

たしは家であなたを恋い慕う気持ちを強く激しく持ち続けましたので、『遠くから恋しい想いを寄せている』という意味を込めて『遠志［yuǎnzhì］』と名付けました。

【訳者注】「遠志」は、漢方薬「遠志」と同名。ヒメハギ科の薬草で、主に去痰薬として用いられる。

三番目の子のときは、あなたは仕入れの品物をすっかり買い揃え、もうすぐにでも家に帰ってくるに違いないと思いましたので、『そろそろ家に帰るに違いない』という意味を込めて『当帰［dāngguī］』と名付けました。

【訳者注】「当帰」は、漢方薬「当帰」と同名。セリ科シシウド属の薬草で、不妊症にも効用があると言う。

四番目の子のときは、何年も何年もあなたを待ち焦がれていたにも関わらず、逢うことができませんでしたので、今度こそ、もう家に帰ってくるはずだと思いまして、『故郷に帰る』という意味の『回郷［huíxiāng］』=『茴香［huíxiāng］』と名付けたのです。」

【訳者注】「茴香」は、漢方薬の名前。セリ科ウイキョウ属の薬草で、血行促進、鎮痛などの効用がある。

夫はそれを聞くと、大笑いして言った。

「ふわっはっはっは。お前の言う通りだとすれば、わしがまた今度、何年か家を空けることになったら、しまいには、家で漢方薬の店を一軒、開くことができそうじゃわい。（そのときには、子どもがどっさり、いや、漢方薬がどっさりできているじゃろうから。）」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・術業部（二四丁裏～二五丁表）。『新鐫笑林広記』巻之三・術業部（第一六四話、五丁表～裏）。○販賣［fànmài］=品物を仕入れて売る、販売する。和刻本は右傍訓「アキナヒスルモノ」（商ひする者）を附す。○数載［shùzǎi］=数年。○朝暮思君。結想成胎。=朝な夕な、あなたのことを思い続けた結果、恋しい想いが実を結び、赤ちゃんを身ごもりました、という意味。「朝思暮想［zhāo sī mù xiǎng］」という語は、現代中国語でもよく用いられる。左訓「オモヒガコリテ ハラム」（想ひが凝りて、孕む）。○家室［jiāshì］=家族、妻子、という意味。「室［shì］」は「妻」の意。○宿舟沙畔［sù zhōu shā pàn］=小船を海岸沿いの岸辺に泊めて、夜を過ごす、という意味。○宿砂［sùshā］=和刻本は「宿沙［sùshā］」に作る。今、中国原本（乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本）により改めた。中国語では、「宿砂」と「宿沙」は全く同じ発音だが、ここは漢方薬の名前「宿砂」と同じであることを示したほうがよい。漢方薬「宿砂」は、日本語では「シュクシャ（縮砂）」と言い、中国語では「縮砂蜜［sùshāmì］」「砂仁［shārén］」などと呼ばれる。中国南方（広東省）および東南アジア原産の薬草。ショウガ科の多年生植物。効能としては、理気作用、健胃作用、整腸作用があり、冷え性、食欲不振、嘔吐、下痢などに良いとされる。○遠志［yuǎnzhì］=二番目の子の名前であるが、同時に漢方薬の名前「オンジ（遠志）」。ヒメハギ科の多年生植物の根（イトヒメハギ）。中国北部、シベリア、朝鮮半島北部原産。鎮静、去痰、抗炎、強壮などの効能がある。○置貨完備［zhì huò wánbèi］=仕入れの品（漢方薬）を、すっかり買い揃えて。「備」は「備」の俗字。左訓「ニモツ カヒト、ノヘ」（荷物、買ひ調へ）。○合當［hédāng］=「当然～しなければならない」という意味を表す助動詞。和刻本はこの二字を合わせて「マサニ～ベシ」と訓ませている。○當歸［dāng guī］=「もうそろそろ帰ってくるべきである」という意味がこもった三番目の子の名前だが、同時に漢方薬の名前でもある。「當」は「当」の正字（旧字）。「歸」は「歸（帰）」の古字。漢方薬「トウキ（当帰）」は、中国・朝鮮半島・日本原産、セリ科シシウド属の多年草。ただし、中国の漢方薬で用いられたのは「カラトウキ」という品種であり、日本の「トウキ」とは僅かに異なる。養血調経作用があり、生理不順や生理痛、さらには不妊症にも効果があると言う。『神農本草経』（嘉永七（一八五四）和刻、巻中・三丁裏）にも、その名が見える。○盼你不到［pàn nǐ bu dào］=あなたを待ち焦がれているのに、あなたに逢えない、という意味。「盼［pàn］」は、「待ち望む」「切に希望する」意の動詞。動詞の後に置かれた「不到［bu dào］」は、その動作が達成できていない意を表す結果補語。和刻本も中国原本（乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本）も、文字の形は「盻［xì］」（怒って睨み付ける）にも見えるが、文意により「盼」の字形が崩れたものと見なすべきであろう。和刻本は「盼」に左訓「ナガメテ」

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

相手があまりにも身分の高い人だったので、極度の緊張のために萎縮してしまった藪医者が、手首で脈をとらなければならないのに、誤って手の甲を押さえてしまったという笑い話。しかし、これだけではもちろん面白くない。「笑いのツボ」は、医者の最後の捨てゼリフにある。

「殴りたいなら殴ってくれても構わないが、あんたのその手には、まったく脈がありません。」

この医者は、自分が脈をとり間違えたことに気づいていないばかりか、脈がないならば生きているはずがないという、当たり前の「医学的」知識すら持ち合わせていないらしい。この話は、「医学的」知識の欠如した、とんでもない「藪医者」を嘲笑おうとしたものであろう。そして、このような「藪医者」は、この先、医者として生きていこうと思っても、おそらく今度こそ間違いなく、脈はない。

⑰取名（名前を付ける）

原文

取名

有レ販二一賣藥材一ヲ。離テ家ヲ数一載也。其ノ妻已ニ生二一下ス四子一ヲ。一日夫**帰**ル。問フ衆一子何レヨリ来ルト。妻曰ク。為二一你カ出一外多一年ナルカ。我レ朝一暮思レ君ヲ。結一想シテ成レ胎ヲ、故ニ命スル名ヲ俱ニ暗ニ藏スル深意一ヲ。長ハ是レ你チ乍チ離レ家室一ヲ。宿ス舟ヲ沙畔一ニ。故ニ名二宿砂一ト。次ハ是レ你チ遠一郷ニ作ル客ト。我レ在レ家ニ志一念ス。故ニ名二遠一志一ト。三ハ是レ料ルニ你ヲ置クコト一貨ヲ完一備シ。合ニ当帰ルレ家ニ、故ニ喚フ当**帰**一ト。四ハ是レ連一年盼シテ你ヲ不レ到ラ。今ハ該ニ返二一**囲**ス故郷一ニ。故ニ喚フ**茴香**一ト。夫聞テ之ヲ大笑シテ曰ク。依二一你カ這一等ニ説ニ来レハ。我レ再ヒ在一外幾年セバ。家一裡竟ニ開キ得一一爿ノ山藥舗一了ラン。

書き下し文

名を取る

薬材を販売するもの 有り。家を離て数載なり。其の妻 已に 四子を生下す。一日 夫 帰る。問ふ 衆子 何れより来ると。妻 曰く。你が出外 多年なるが為に。我 朝暮 君を思ふて。結想して胎を成す、故に 名を命ずる 俱に 暗に深意を蔵す。長は 是 你 乍ち家室を離れ。舟を沙畔に宿す。故に 宿砂と名く。次は 是 你 遠郷に客と作る。我 家に在て志念す。故に 遠志と名く。三は 是 料るに 你 貨を置くこと完備し。合当に 家に帰るべしと、故に 当帰と喚ぶ。四は 是 連年 你を盼して到らず。今 該に故郷に返回すべし。故に 茴香と喚ぶ。夫 之を聞て 大笑して曰く。你が這等に説に依り来れば。我 再び在外 幾年せば、家裡 竟に 一爿の山薬舗を開き得 了らん。

現代語訳

漢方薬に用いる生薬の材料を商っている男が、数年間も家を空けて（仕事に明け暮れて）いた。するとその妻は、（夫の留守中に）すでに四人も子どもを生んでいた。ある日、夫が帰ってきて、

「この大勢の子どもたちは、どこからやってきたのじゃ。」

と訊ねた。妻は言った。

「あなたが何年もの間、外に出ているものだから、わたしは、朝な夕な、あなたのことばかり思い続け、その結果、恋しい想いが実を結び、赤ちゃんを身ごもることになったのです。ですから、子どもの名前を付けるとき、どの子もみんな、名前にこっそり奥深い意味を込めさせて頂きました。

一番目の子は、あなたが突然家族のもとを離れ、小船を海岸沿いの岸辺に浮かべ、そこで宿泊していたのだろうと思いまして、『（夫は）砂浜で夜を明かしている』という意味の『宿砂［sùshā］』という名前にしました。

【訳者注】「宿砂［sùshā］」は、漢方薬「宿砂（縮砂）」と同名。ショウガ科の薬草で、冷え性に効く。

二番目の子の場合はですね、あなたが故郷を遠く離れたところで暮らしており、わ

は、藪医者家族の四人が発するリズミカルで音楽的な、最後の七言句の掛け合いにある。

為人切莫学行医。（父曰く、人間は、絶対医者など、すべからず。）
為你行医害老妻。（母曰く、あんたが医者などしているせいよ、こんなに私がつらいのは。）
頭重脚軽擡不起。（弟曰く、うわわわわ、頭でかっち尻つぼみ、持ち上げられない、ぐらついて。）
以後医人揀瘦的。（兄曰く、お父ちゃん、次から患者をとるときは、痩せた人だけ選んでね。）

ちなみに、日本語訳では、七五調や五七調を用い、原文の滑稽味を少しでも醸し出すよう試みた。

⑯医按院（地方まわりのお役人を診察する）

原文

医按院

一按一臺患レ病ヲ。接レ医ヲ胗一視セシム。医驚一持畏一縮シテ。錯テ看二了ス手背ヲ一。按一院大ニ怒リ、責テ而逐レ之ヲ。医曰ク。你ガ打ツハ便チ打チ得テ好シ。只、是レ你ガ脈一息俱ニ無シ一了。

書き下し文

按院を医す

一按台　病を患ふ。医を接して脈視せしむ。医　驚持畏縮して。錯て手背を看了す。按院　大に怒り、責て之を逐ふ。医　曰く。你　打つは　便ち　打ち得て好し。只　是　你が脈息　倶に無し。

現代語訳

ある地方まわりのお役人さま、病気になってしまったので、医者を呼んで、診てもらった。医者は（相手があまりにも身分の高い人なので）、びっくり仰天、思わずドギマギしてしまい、（本来、患者の手首の内側を押さえて脈を診なければならないのに）間違って手の甲を押さえて脈をとってしまった。

（それを見て、とんでもない藪医者だと思った）巡按御史さまはカンカンに怒り、この医者を追い払った。（立ち去り際に）医者は言った。

「お役人さま、その手でわたしを打ちたいというのなら、それはそれで構わないのですが、ただですね、わたしを打っているあなたさまのその手には、脈がまったくないのです。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・術業部（二四丁表～裏）。『新鐫笑林広記』巻之三・術業部（第一五四話、三丁裏）。○按院［ànyuàn］＝明清時代の官職「巡按御史［xùnànyùshǐ］」のこと。「巡按御史」は、地方に派遣され、各地の政治や民情を視察した。日本でも、奈良時代には同様の官職として「按察使」が置かれた。和刻本の「按臺」に附された左訓「アゼチノクハン」（按察使の官）は、この奈良時代の官職名である。○按臺［àntái］＝巡按御史さま。「臺」は「台」の正字（旧字）で、尊敬の気持ちを表す接尾辞。左訓「アゼチノクハン」（按察使の官）。○接［jiē］＝迎える。「迎接［yíngjiē］」とも言う。現代中国語と同じ。左訓「ムカヘテ」（迎へて）。○胗視［zhēnshì］＝診察する。「胗」には「鳥の胃袋（砂肝）」という意味もあるが、ここは「診」（病状を見る）と同じ。左訓「ミヤクヲミセル」（脈を診せる）。○驚持畏縮［jīng chí wèisuō］＝（相手があまりにも立派な身分の人なので）びっくり仰天し、怖じ気づいて尻込みする、という意味。ただし、動詞「驚［jīng］」の後に置かれた「持［chí］」の用法については、未詳。左訓「ブルブル　オソロシガル」（ぶるぶる恐ろしがる）。○打ツハ便チ打チ得テ好シ＝（私を）殴るというのならば、殴ってもよいが。「便［biàn］」は、「～するならば…してもよいが」「～であれば、つまり…」という意味の副詞。「得［de］」は「得」の異体字。「打得好」は、「（動詞）＋得＋（様態補語）」の構文で、「殴る」という行為のやり方が「好（よい）」ことを表している。現代中国語と同じ。本来は「殴り方がよい」という意味であるが、ここは文脈的に「殴るというのならば、殴っても構わないが」という意味になる。左訓「ウツコトハヨクウチテモ」（打つことは、よく打ちても）。○脈息［màixī］＝脈拍のこと。「脈搏［màibó］」ともいう。「脈」は「脈」の異体字。左訓「ミヤク」（脈）。

『笑顔はじめ』第一三話（天明二年（一七八二）頃序、東京大学総合図書館・霞亭文庫蔵本、一四丁表～一五丁裏）

薬違

医者 くすりちがひをして 得
意の家の番頭を もり殺す 主人
大きに怒り 御奉行所へ 引つれて
下死人に ねかはう といふ故 いろ〳〵
詫言をして 死骸をは 葬り 少
しは 罪を つくのわんと ねがひ
ければ よう〳〵 主人も 納得して
ゆるしけるまゝ 医者 よろこび
人を雇 葬んと思へとも 貧な
れは 家に帰り 妻子を 呼ゝで
棺を舁 行 途中で 人と
生れて 必 医者をする事なかれ
と くよ〳〵と いへば 女房 恨て おまへ
が 医者ゆへ 此ような 重ひ 死人
をかつぐ くるしみ 堪かたしと 涙
をこぼしけれは もし とゝ
さん 此度から 痩た 病人 斗
療治を しなさい

『落しばなし』第三三話（五返舎半九作、嘉永三年（一八五〇）刊、架蔵本、一八丁裏）

やぶいしや

やぶいしや ある所の 居候を
もりころしけるに おやぶん
はらをたて 貴さまが もりころし
たから 寺へ もつていけと いはれ
ぜひなく 死人を桶にいれ
ひとりでは ゆかれぬゆへ 十一
ばかりの むすこを つれきたり
二人して になひ行けるが むすこは
おもたいとて 道〳〵やすみながら
かたを いたがりて さすりながら
とつさん こんどから れうぢを
するなら 子供が
いゝよ

中国笑話が日本にもたらされ、江戸小咄として再生される過程において、登場人物の数や役割など、徐々に変化していくさまが見て取れる。

原話である『笑林広記』「擡柩」に登場する藪医者家族は、父と母と二人の息子、合計四人であり、その四人がそれぞれ韻字を用いた七言句で、一人一言ずつぼやいている。

それに対して、中国笑話の翻訳『笑林広記鈔』「擡レ柩ヲ」では、父と母と一人の子、三人家族となっており、『笑林広記鈔』を利用して書かれた江戸小咄『笑顔はじめ』「薬違」も、それを受けて、父と母と一人の息子の三人家族、それから五十年あまり後に刊行された江戸小咄『落しばなし』の「やぶいしや」では、藪医者家族は父と息子の二人であり、柩を担ぎながら、最後に一言ぼやいているのは、「十一ばかりのむすこ」ただ一人となっている。話の構造が、より簡略化され、洗練され、日本化されている、ということであろう。

余説

この話は、藪医者が自分の医療ミスにより患者を死なせたにも関わらず、遺体を運ぶのが重くて大変だから、今度からは軽くて運びやすい痩せた人だけ治療しよう、などという、とんでもなく筋違いの言葉を、子どもの口から言わせてしまう、というものである。医者の見立て違いによって患者を死なせることの多かった、当時の中国社会を反映した「藪医者をからかった話」の一つではあろうが、この話の「笑いのツボ」

入れて「（上方向に）持ち上げる」ことが「できない」意を表す「方向補語の不可能形」。肯定形は「擡得起」（持ち上げることができる）。現代中国語と同じ。○爹爹［diēdie］＝お父さん、お父ちゃん。子どもが父親を呼ぶときの砕けた言い方。現代中国語でも用いられる。左訓「ト、サン」。中国原本は「爹爹」の後に句点「。」を打ち、次のセリフが前の二人と同様に、リズミカルな七言句であることを明確に示しているが、和刻本はこの箇所で句読を切らない。○以後壂人揀瘦的＝これからは、（お医者さんとして）患者さんを診てあげるときには、痩せた人を選んでね、という意味。藪医者家族の口から出た言葉は、いずれもリズミカルな七言句であるだけでなく、すべて母音［i］（『壂（医）［yī］」「起［qǐ］」「的［dí］」）で押韻している。「的」は、口頭語としては［de］と発音されるが、現在でも歌詞などの場合には［di］と読まれる。和刻本は「壂人揀瘦的」に左訓「ヤセタノヲエランデリヤウヂセヨ」（痩せたのを選んで療治せよ）を附す。

補注

この話は、原本『絶纓三笑』『笑府』や和刻本『笑府』三種には収録されていないが、早く伊丹椿園『笑林広記鈔』（安永七年（一七七八）刊、第四話「擡柩」）に日本語訳が収められ、この和文訳に基づいた小咄が『笑顔はじめ』（天明二年（一七八二）頃序、第一三話「薬違」）に収録され、また噺本『落しばなし』（五返舎半九作、嘉永三年（一八五〇）刊、第三三話「やぶいしや」）にも、よく似た小咄が取り上げられている。

『落しばなし』について、武藤禎夫氏は、『噺本大系』第十六巻（東京堂出版、一九七九年一一月）所収の解題（三六二頁）の中で、次のように述べている。

本書は、宮尾しげを氏の『小噺年表』によると、五返舎半九作、天保八年刊『落噺仕立おろし』が元板であり、「嘉永元年に梅亭金鵞作として、貞房の画の表紙をつけ『臍の茶わかし』『忠孝昔ばなし』、嘉永三年に『落ばなし』と改題、半九の自序より其まま再摺される」とある。架蔵本の序は、たしかに年時を削ったとみられ、ただ「初春　五返舎半九述」とのみ残るが、そこに天保八年の年記があったのであろう。序を書いた五返舎半九の作であり、底本の表紙絵にある「梅亭金鵞作／橘蝶楼貞房画」は画家はともかく、作者名は再板時の細工である。

五返舎半九作『落噺仕立おろし』（天保八年（一八三七）刊）は、国立国会図書館に現存するようだが、未見。なお、架蔵の『落しばなし』表紙絵にも、「庚戌春新版」と刻されている。「庚戌」は、嘉永三年（一八五〇）を指す。

『笑林広記鈔』『笑顔はじめ』『落しばなし』の本文は、以下の通りである。『笑林広記鈔』は京都大学附属図書館蔵本による翻刻（『噺本大系』第二十巻に影印あり）、『笑顔はじめ』は東京大学総合図書館霞亭文庫蔵のウェブ公開画像データによる翻刻（『噺本大系』第十二巻に翻刻あり）、『落しばなし』は架蔵本による翻刻（『噺本大系』第十六巻に影印および翻刻あり）である。

なお、『笑林広記』所収「擡柩」は、『中国笑話選　江戸小咄との交わり』（松枝茂夫・武藤禎夫　編訳、平凡社、東洋文庫24、一九六四年八月、二六五～二六六頁）、『歴代笑話選』（松枝茂夫訳、平凡社、中国古典文学大系59、一九七〇年五月、三五八～三五九頁）にも翻訳が備わる。

『笑林広記鈔』第四話（伊丹椿園訳、安永七年（一七七八）刊、京都大学附属図書館蔵本、二丁表～裏）

擡レ柩ヲ

醫師　薬リ違ヒニテ　アル家ノ僕ヲ殺ス　主人　大ニ　憤
リ　多クノ僕ニ命シテ　打擲セシメ　且　官ニ告ントス　醫　サマ
ザマ哀ミ　ワビテ　死骸ヲ　葬リ　スコシク罪ヲ　謝セント云　主
人　ヤウヤク是ヲ許ス　醫　喜ンテ　人ヲ偏ヒ　葬ラント思ヘ
トモ　貧シケレハ　家ニ歸リ　妻子ヲ呼来リ　柩ヲ擡テ
行ケル　中途ニテ　自ラ嘆シテ曰　人ト生レテ　必ス　醫ヲ
學フコトナカレ　妻ハ夫ヲ恨ミテ曰　汝ガ醫ヲナスユヘニ
如此　肥テ重キ死骸ヲカクノ苦ミニ堪ガタシト詈ル
子ノ曰　爹々　是ヨリハ　痩タル人ノミヲ療治アレ

ませ。」

そこで主人は許してやったものの、医者は貧苦に喘いでおり、人を雇う余裕などない。家には二人の息子と夫と妻と、（全部で）合わせて四人いるので、（家族四人で力を合わせ）みんなで柩を担いで行くことにした。途中までやって来て、医者は溜息まじりに呟いた。

「人間は、絶対医者など、すべからず。（為人切莫学行医。）」

すると、妻は夫を責めて、こう言った。

「あんたが医者などしているせいよ、妻の私がつらいのは。（為你行医害老妻。）」

下の息子は、こう言った。

「うわわわわ、頭でっかち尻つぼみ、持ちあげられない、ぐらついて。（頭重脚軽擡不起。）」

上の息子は、言った。

「お父ちゃん。これから患者をとるときは、痩せた人だけ選んでね。（以後医人揀瘦的。）」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・術業部（二四丁表）。『新鐫笑林広記』巻之三・術業部（第一四四話、一丁裏）。○術業部［shùyè bù］＝医術や専門的な技能をもつ職人たちの笑話を集めた部門、という意味。藪医者・床屋・酒屋などをからかうものが多い。『笑府』巻四「方術部」および巻五「広萃部」に相当する。中国刊本『新鐫笑林広記』には「術業部」として七三話収録されているが、和刻本はそのうちの二一話を採録する。なお、遠山荷塘は、和刻本「譯解笑林廣記目次」（一丁表）において、「術業部」を「郎中 画工 做工ナトノ差過タル可笑コトヲコ、ニアツム」（術業部には、医者や画家や職人などの失敗譚を収録する。）と説明している。○医死［yī sǐ］＝医者が治療に失敗し、患者を死なせてしまった、という意味。「医［yī］」は、ここでは「治療する」意の動詞。「死［sǐ］」は、動詞の後に置かれ、その動作の結果がどうなったかを表す結果補語。左訓「モリコロス」（盛り殺す）。「盛り殺す」は、医者が患者に誤った薬を「盛り」（＝飲ませて）殺してしまった、という意味。○呼［hū］＝（人を）呼んで～させる。ここでは、大勢の召使いたちを呼び寄せ、医療ミスで患者を死なせてしまった医者をボコボコに殴らせる意。和刻本は、「呼」を「よぶ」とは訓まず、「～をして…せしむ」と訓読させている。古典的な漢文訓読には見られない、珍しい訓み方である。○毒打［dúdǎ］＝ひどく殴る、ぶちのめす、ボコボコにする、袋叩きにする。○跪求至再［guì qiú zhì zài］＝跪いて（自らの罪を許してもらえるように）再三再四、何度も何度もお願いした、という意味。「求」は、「もとめる」意ではなく、「お願いする」「懇願する」意。左訓「アヤマルコトサイサン」（謝ること再三）。○私打可免。官浚難饒。＝個人的に殴りとばして（懲らしめて）やるのは許してやったとしても、（医療ミスにより人を殺しているのだから、いずれにしても）公の場に出て、法の裁きを受けることは免れがたい、という意味。「私」は「私」の異体字。「可免［kě miǎn］」は「難免［nánmiǎn］」（免れがたい）の対義語。「饒［ráo］」は「許す」「容赦する」「勘弁する」意。「浚」は「法」の異体字。左訓「ナイシヤウニテ ウツノハ ユルサルレトモ オモテニダセバ ユルサレヌ」（内証にて打つのは許さるれども、表に出せば許されぬ）。○送官懲治［sòng guān chéngzhì］＝役所に引き渡して、処罰する、という意味。左訓「タツシニシテ ミセシメ」（達しにして、見せしめ）。「達しにして見せしめ」とは、「官から広く告げ知らせて」つまり「役所に突き出して」という意味。○殯殮［bìnliàn］＝遺体を柩に納め（「殮」）、墓地に埋葬する（「殯」）意。左訓「ソウサウセン」（葬送せん）。○無力僱募［wú lì gùmù］＝（お金を支払って）人を雇う力がない、という意味。左訓「ヤトヒビトガデキヌ」（雇い人ができぬ）。○家有二子。夫妻四人、共来擡柩。＝家には二人の息子と夫婦二人の合計四人がおり、その家族四人が全員揃って棺桶を担ぎに来た、という意味。和刻本は「家有二一子一。夫妻四人共二来ヲ擡レス柩ヲ。」と句読を切り間違えている。中国原本（京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊本）は、「家有二子」で句読を切らず、「家有二子夫妻四人。共来擡柩。」と読んでいる。今、中国原本の句読に従って解釈する。○害［hài］＝不利益をもたらす、損失を与える。ここは、妻に苦労をかける意。左訓「クラウカケル」（苦労かける）。○頭重脚軽擡不起＝（大人二人と子供二人で、遺体の入った棺桶を担ごうとしているのだが）脚よりも頭のほうが重すぎて（うまくバランスが取れず、子どもの力では）持ち上げることができない、という意味。左訓「ヒヨロヒヨロシテ カツガレヌ」（ひょろひょろして担がれぬ）。「擡不起［tái bu qǐ］」は、動詞「擡」（担ぐ）と方向補語「起」（上方向に起き上がっていく方向性を表す）の間に否定詞「不」を

『笑得好二集』（石成金撰、乾隆四年（一七三九）刊）

講趙錢孫李（笑有錢騙人的。）

童子讀百家姓。首句求師講解。師曰。趙是精趙的趙字。因蘇州人說放肆爲趙也。錢是有銅錢的錢字。孫是小猴猻的孫字。李是張三李四的李字。童子又問。此句可倒轉來也講得麽。師曰。也講得。童曰。如何講得。師曰。姓李的小猴猻。有了幾個銅錢就精趙起來。

余説

この話は、『百家姓』という一八世紀の中国における初等教育用テキストをダシに、李という姓の「にわか成金」を馬鹿にしたものである。

近世後期（一九世紀）の日本においては、経典の解釈をねじ曲げて遊ぶ「枉解もの」と呼ばれる漢文戯作が流行したが、『笑林広記』のこの話は、経典ではないものの、知識階級に属する当時の幼い子どもたちが誰しも暗唱していたであろう『百家姓』という基本テキストの文章を弄ぶという点において、「枉解もの」と一脈相通じるものがある。

この話は、具体的には『百家姓』冒頭の四字句「趙錢孫李」をひっくり返して下から読み、そのひっくり返った「李孫錢趙」という文字に「李」というサル（孫）が、小銭（錢）を貯めて、偉そうに（趙）なりくさった」などという、「にわか成金」に対する恨みのたっぷりこもった牽強付会の解釈を加えることによって、突然金持ちになった李の野郎の、実にむかつく横柄な態度を嘲笑しようとしたものである。

術業部

⑮擡柩（棺桶を担ぐ）

原文

術業部

擡レ柩

一醫ー生醫ニ一死ス人ヲ一。主ー家憤ルコト甚シ。呼ニ群僕ヲシテ毒打セ一。醫跪キ求スル至ー再。主曰ク。私打ハ可クモ免ル。官法ハ難シ饒ス。即チ命ス送ッテ官ニ懲ー治スルヲ一。醫畏レテ罪ヲ哀ー告シテ曰ク。願クハ僱テ人ヲ擡往殯ー殮セン。主人許レス之ヲ。醫苦ミ家貧ヲ一。無シ力ニ僱募スルニ。家ニ有リ二子一。夫妻四人、共ニ来テ擡レ柩ヲ。至リ中途ニ。醫生嘆シテ曰ク。為レ人ト切ニ莫レ學フ行ー醫一ヲ。妻咎メテ夫ヲ曰ク。為レ你カ行ー醫一害ス老妻一。幼ー子云ク。頭重ク脚軽クシテ擡シ不レ起サレ、長子曰ク。爹爹、以後醫セバ人ヲ揀ベ瘦的ヲ。

書き下し文

術業部

柩を擡す

一医生人を医死す。主家憤ること甚し。群僕をして毒打せしむ。医跪き求すること至再なり。主曰く。私打は免るべくも。官法は饒し難し。即ち官に送つて懲治するを命ず。医罪を畏て哀告して曰く。願くは人を僱て擡ぎ往て殯殮せん。主人之を許す。医家貧を苦み。僱募するに力無し。家に二子有り。夫妻四人、共に来て柩を擡す。中途に至り。医生嘆じて曰く。人と為て切に行医を学ぶ莫れ。妻夫を咎めて曰く。你が行医の為に老妻を害す。幼子云く。頭重く脚軽くして擡し起されず、長子曰く。爹爹、以後人を医せば瘦たる的を揀べ。

現代語訳

あるお医者さん、薬の処方を間違って、人を死なせてしまった。患者の家は怒り狂い、召使いたちを呼び集めて（この医者を）袋叩きにした。医者は土下座して何度も何度も謝罪した。

主人は言った。

「（それでは、これくらいで）リンチは勘弁してやってもよいが、それでも出るところへ出て、きちんと裁きを下してもらわねばならんぞ。」

そして、（主人はこの医者を）役所に突き出し、処罰するよう命じた。医者は（裁判所に突き出されたら、もはや自分の命はあるまいと思い）御上に訴え出ることだけは、どうか勘弁してくださいと、涙を流してお願いした。

「お願いです、私の方で人を雇い、亡くなった方の遺体を柩に納め、墓地に埋葬させていただきますから、どうかそれで（御上に訴え出るのだけは）勘弁してください

るが、今、中国原本に従い、「之」の一字を削除した。○小猢猻［xiǎo húsūn］＝ちっぽけなアカゲザル。「小」は、相手を軽んじる意味を表す接頭辞。「猢猻［húsūn］」は、中国北方の山林に棲息する毛むくじゃらのサル。人を小馬鹿にするときに用いる差別語であろう。言うまでもなく、厳密には、姓の「孫［Sūn］」と、アカゲザルの「猻［sūn］」という文字は、発音は同じだが、別字。左訓「コザルト云ノ」（原文のママ）。和刻本の左訓は、「云」字がやや崩れた字形になっており、改刻または誤刻の可能性がある。○李ハ是姓－張姓－李的ノ李字也＝「李」は、人の名前で「張」とか「李」とか言うときの「李」の字である、という意味。『笑府』所収話は、「李。是張三李四的李字。」（「李」は、「張三李四（張家の三男とか李家の四男＝中国人の代表的な名前＝誰それさん）」と言うときの「李」の字である。）とする。『笑林広記』本文は、『笑府』の語句を、さらに嚙み砕いた、子どもにも分かりやすい平易な表現に言い換えている。ただし、「張三李四」も、それほど難解な語ではない。「張三」は、『訳解笑林広記』第七三話「田主見鶏」に既出。○倒轉［dào zhuǎn］＝逆さにする、ひっくり返す、反対向きに転じる意。「轉」は「転」の正字。ここは、『百家姓』冒頭の四字句「趙錢孫李」の語順をひっくり返して「李孫錢趙」と読んだ場合にも意味が通るように解釈できるか、という意味。○也得［yě dé］＝それもできる。左訓「ソレモナル」。○不過［búguò］＝ただ～にすぎない、所詮は～でしかない。「只不過（是）」とも言う。現代中国語と同じ。ここは、和刻本のように「不過」を文末まで修飾するものと解釈するのではなく、発話者の（七音を基調とした）言葉のリズムに従って、「不過姓李的小猢猻。」（「李」という名前の、ちっぽけなアカゲザルのような存在にすぎない、この野郎が）と理解したほうがよい。○一－時就チ鐸－趙シ起来＝急に偉そうに横柄な態度をとるようになってきた、という意味。『笑林広記』のテキストでは、中国刊本も和刻本もいずれも「鐸趙［duózhào］」となっているが、『笑府』および『笑得好』所収話は、この最後の箇所も前半部分と同じく「精趙」とする。和刻本は、「鐸趙起来」に左訓「アホウニナツテクル」（阿呆になってくる）を附す。しかし、これは前述の「趙字」に附された『笑林広記』の原注「呉俗謂人獃為趙」（呉の方言では、バカな人のことを『趙』という。）の解釈に従ったものであり、やはりここも『笑府』の注記に従い、「趙」は「偉そうで横柄な態度をとる」意としておく。「鐸」については未詳だが、この呉方言語彙は、あるいは「精」よりももっと程度が甚だしいことを表す副詞か。だとすれば、『笑林広記』テキストが、文末オチの部分で「精趙」を「鐸趙」に言い換えたことにも、それなりの合理性が認められるかもしれない。

補注

この話は、『笑府』巻一（第三話「麟」（注））および『笑得好二集』（「講趙錢孫李」）に類話がある。『笑得好』は、清・石成金撰の笑話集で、乾隆四年（一七三九）刊『家宝二集』「人事通」に収録される（王利器輯録『歴代笑話集』、上海古典文学出版社、一九五六年、四五五頁参照）。なお、和刻本『笑府』等に類話はない。

『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』（岩波文庫、一九八三年一月、一四～一五頁）を参照。

『笑府』および『笑得好』収録話の原文は、以下の通りである。『笑得好』の引用は、王利器輯録『歴代笑話集』（前掲書、四九七頁）に拠るが、文字は正字に、句読点は日本式に改めた。『笑林広記』本文は、『笑府』とほぼ同文である。

『笑府』第三話（巻一古艶部、泰昌元年（一六二〇）頃成立か、筑波大学中央図書館蔵本、二丁表～裏）

麟

孔子見死麟。哭之不置。弟子謀所以慰之者。乃編錢掛牛體。告孔子曰。麟已活矣。孔子觀之。曰非也。分明一隻牛。只多這幾箇錢耳

有姓李者。暴富而驕。或嘲之云。一童子讀百百家姓首句。求師講解。師曰。趙。是精趙的趙字［蘇語謂放肆曰趙］。錢。是有銅錢的錢字。孫。是小猢猻的孫字。李。是張三李四的李字。又問倒轉可講得否。師曰。也得。童曰。如何講。師曰。姓李的小猢猻。有了幾箇銅錢。就精趙起來

一時　就ち　鐸趙し起き来るといふに過ぎず。

現代語訳

李という名前の人が、にわかに大金持ちになり、たいへん驕り高ぶっていた。ある人が、それを嘲って、次のような話をした。

ある子ども、『百家姓』（という初等教育用テキスト）の冒頭部分の一句（「趙銭孫李」）について、どのように解釈したらよいか、先生に質問したところ、先生は、次のように言いました。

「『趙』というのはね、『驕り高ぶった、横柄な』という意味の『精趙［jīngzhào］』という言葉に出てくる『趙［zhào］』という字のことですよ。」

【原注】呉の方言では、馬鹿な人のことを『趙』という。

【訳者注】『笑府』所収の類話（第三話「麟」（注））には、この語に対して「呉の方言では、偉そうに勝手気ままにやりたい放題するさま（「放肆［fàngsì］」）を『趙』と言う。」と書かれており、今はこの解釈に従う。）

「『銭』というのはね、『小銭を持ってますよ』と言うときの『小銭』という意味の『銅銭［tóngqián］』という言葉に出てくる『銭［qián］』という文字のことですよ。また、『孫』というのはね、『ちっぽけな、毛むくじゃらのアカゲザル』という意味の『小猢猻［xiǎohúsūn］』という言葉に出てくる『孫［sūn］』という文字のことですよ。そして、『李』というのはね、人の名前の張さんとか李さんとか言うときの『李［Lǐ］』という文字のことですよ。」

すると、子どもはまた、次のように訊ねました。

「（『百家姓』冒頭の四字句「趙銭孫李」は、その文字を）ひっくり返して下から読んでも意味が通るように解釈することはできますか。」

先生は、言いました。

「はい。下から読んでも意味は通りますよ。」

子どもは、言いました。

「それは、どのような意味ですか。（読んでみて。）」

そこで、先生は言いました。

「（語順をひっくり返して下から『李孫銭趙』と読んだ場合はね、こういう意味になりますよ。つまり）『李』という名前の、ちっぽけな毛むくじゃらのアカゲザル（『猻』『孫』）にすぎないこの野郎は、ちょっと小汚い小銭（『銭』）をしこたま貯め込んで、急にアホみたいに威張りだし、みるみる横柄な態度をとる（『趙』）ようになりくさりました、とね。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（一三三丁表～裏）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第六〇話、一三丁裏）。○諸解［jiǎngjiě］＝（講読用テキストの文章や字句を）解釈する、講釈する。「諸」は「講」の異体字。「解」は「解」の俗字。左訓「カウシヤク」（講釈）。○暴冨［bàofù］＝急に金持ちになること、にわか成金。「冨」は「富」の俗字。○百家姓［Bǎijiāxìng］＝童蒙書の書名。子どもが中国人の姓を覚えるために編まれた初等教育用テキスト。一字の姓（単姓）を四〇八種、二字の姓（復姓）を三〇種、計四三八種の姓を載せる。宋代（十世紀頃）には、すでに成立していたとされる。子どもが諳誦しやすいように四字句に揃えられ、偶数句で押韻している。「趙銭孫李、周呉鄭王。馮陳褚衛、蔣沈韓楊。」で始まり「墨哈譙笪、年愛陽佟。第五言福、百家姓終。」で終わる。○鮮釈［jiěshì］＝説明する。「鮮」は「解」の異体字。左訓「カウシヤク」（講釈）。○精趙［jīngzhào］＝『笑林広記』の編者は「大バカ者」の意とするが、『笑府』所収話に附された注記に従い、「驕り高ぶった、横柄で自分勝手な（態度）」とする。詳細は次項参照。○［呉俗謂人獃為趙］（割注）＝蘇州近郊の中国南方の方言では、「バカな人、愚鈍な人（「獃［dāi］」）」のことを「趙［zhào］」と言う、という意味。これは、中国原本に見える原注であり、和刻本の施訓者・遠山荷塘による訳注ではない。なお、この話とほぼ同文の類話を収める『笑府』巻一（第三話「麟」（注））には、「精趙」という語に「蘇語謂放肆曰趙」（蘇州の方言で、「やりたい放題、勝手気まま」な様子を「趙［zhào］」と言う。）という割注が附されており、『笑林広記』の解釈とは微妙に異なる。文頭に「暴冨而驕」と書かれていることから判断すれば、文脈上は『笑府』の解釈（驕り高ぶっている→横柄な態度→やりたい放題）の方が自然であるように思われる。また、和刻本は「呉俗謂人獃之獃為趙」とす

與張三却與誰。張三曰。施相公。如何頃刻
間兩様説話。施曰。方纔這句話是無稽［雞］
之談。此刻這句話倒是見機［雞］而作。

田畑を請け負う

崇明という所の小作人は、田畑を借り受ける際に、まずニワトリやアヒルを地主に贈るというのが一般的なならわしになっていた。

ある人が、施という名前の人に田畑を借り受けた。施さんは言った。

「この田畑、お前さんには、植えさせない（此田不與張三種）。」

そこですかさず、この小作人はニワトリを差し出した。すると施さんは手の平を返したように、こう言った。

「この田畑、お前さんに貸さずして、いったい誰に貸すものぞ（不與張三却與誰）。」

小作人は、言った。

「施の旦那さま、とっさの間にまったく反対のことを言うとは、いったいどういうわけですか。」

施さんは言った。

「さっき、あのように（お前さんには土地を貸さないと）言ったのは、根も葉もない、そして鶏もないデタラメじゃったということで（「無稽之談［wú jī zhī tán］（荒唐無稽なデタラメな話）」=「無鶏之談［wú jī zhī tán］（ニワトリがいないときの話）」）、今、このように（お前さんに土地を貸すと）正反対のことを言ったのは、つまり、機を見て鶏を見て、そしてすばやく行動した、というわけじゃ（「見機而作［jiàn jī ér zuò］（タイミングを見計らって行動する）」=「見鶏而作［jiàn jī ér zuò］（ニワトリを見て行動する）」）。」

余説

この話は、金持ちのくせに、せこくてケチな地主が、ニワトリをもらえるかどうかで、小作人に田畑を貸すかどうかを判断するという、例によって経済的な特権を有する富裕層をからかった話だが、「笑いのツボ」は、最後に見られる中国語のダジャレにある。

「無稽之談［wú jī zhī tán］（根も葉もないデタラメな話）」「見機而作［jiàn jī ér zuò］（タイミングを見計らって、すばやく行動する）」という語は、いずれも現代中国語としても通じる成語であり、「稽［jī］」と「鶏［jī］」、「機［jī］」と「鶏［jī］」は完全に同音語であるため、この話は、そのまま現代中国語のダジャレとしても通用する。「考えるべき根拠がない」という意味の「無稽」が「（手土産としての）鶏がない」という意味にもなり、「機を見てすばやく行動する」という意味の「見機而作」が「（手土産としての）鶏を見てすばやく行動する」という意味にもなるということである。

ただ、この手のダジャレは、中国語を音読してこそ味わえるものであり、翻訳された日本語や、訓読文で味わえる類のものではない。やはりこの話も、江戸時代きっての中国語通であった和刻本の施訓者・遠山荷塘好みの話柄と言うべきである。

⑭講解（『百家姓』冒頭部分の解釈）

原文

講一解
有二姓李者一暴富而驕ル。或嘲ツテ之ヲ云ク。一童讀二百家姓ノ首句一ヲ、求二ム師ノ鮮釈一ヲ。師曰ク。趙ハ是レ精一趙的ノ趙一字也［呉一俗謂テ人ノ獣ヲ為レ趙ト］。錢ハ是有ニル銅錢一的ノ錢字也。孫ハ是小猢猻的ノ孫字也。李ハ是姓一張 姓一李的ノ李ノ字也。童又問フ 倒一轉シテ亦タ可キ二誨シ得一否ヤ。師曰ク。也得。童曰ク。如何カニ誨セン、師曰ク。不レ過ド姓李的ハ小猢猻。有二リ了レハ幾ク個ノ臭銅錢一。一一時 就チ鐸一趙シ起来ト云ニ。

書き下し文

講解
姓李なる者 有り。暴富にして驕る。或ひと 之を嘲つて云く。一童 百家姓の首句を読む、師の解釈を求む。師 曰く。趙は 是 精趙の趙字なり。［呉俗 人の獣を謂て趙と為す］錢は 是 銅錢の錢の字なり。孫は 是 小猢猻の孫字なり。李は 是 姓張 姓李の李の字なり。童 又 問ふ 倒転して 亦 講し得べきや。師 曰く。也得。童 曰く。如何に講せん、師 曰く。姓李の的は 小猢猻。幾個の臭銅錢 有り了れば。

zuò」という成語が「ニワトリを見てすばやく行動する」（「見鶏而作［jiàn jī ér zuò］」）という意味にも聞こえてしまったというわけである。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（一三三丁表）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第五九話、一三丁表）。○田主［tiánzhǔ］＝田畑の所有者、地主。○畝［mǔ］＝面積の単位。「畝」は「畝」の異体字。中国原本（乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本）も和刻本も、いずれも異体字「畝」に作る。現代中国の一畝は約六・六六七アールに相当するが、近世中国における一畝は、一尺を約三〇㎝とした場合、約五・四アールになる。計算式は、一畝＝二四〇方歩＝二四〇×（五尺×五尺）＝二四〇×（一・五ｍ×一・五ｍ）＝五四〇㎡。○租與［zū yǔ］＝（人）に（物を）賃貸しして（～させる）、という意味。ここでは、地主が「張三」（後出）という小作人に余った田畑を貸してやる、という意味。左訓「ツクダ」（佃）。「佃」は、荘園領主の直営田を言うが、実際の耕作は、下層の下人が請け負った。平安時代から戦国時代にかけての用語。○張三［Zhāng sān］＝誰かさん、何某。本来「張家の三男坊」という意味だが、不特定の個人名を言う場合に用いられる。第六九話「春生帖」の文中に見えた「某人」と同じような用語。「張三李四［Zhāng sān Lǐ sì］」とも言う。「張」も「李」も、中国人の代表的な姓。○雞［jī］＝ニワトリ。「雞」「鷄」「鶏」は、いずれも同字。○一隻［yì zhī］＝一羽、一匹。動物や鳥を数える助数表現。「隻［zhī］」は、現代中国語では「只」と表記される。○将雞藏于背後＝ニワトリを背中の後ろに隠した、という意味。「将［jiāng］」（～を）は、目的語を動詞の前に持ち出す「処置式文」に用いられる前置詞（介詞）。現代中国語「把［bǎ］」と同じ。○吟哦［yínʼé］＝リズミカルな口調で言う、という意味の動詞。ここでは、七言句を「一・二・三」のリズムに乗せて、詩吟のように口遊んでいる。○此田不與張三種＝この田はな、誰それ君には、植えさせない、という意味。和刻本は「此田」の二字を欠くが、ここは、前述の通り、詩吟のようにリズミカルに口遊む箇所であるため、後に出てくる「不與張三却與誰」と同じく、七言句でなければならない。今、中国原本（乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本）により、原文を改めた。○後［hòu］＝後になって。「後」は「後」の異体字。○無稽之談［wú jī zhī tán］＝根も葉もない話、デタラメな話、荒唐無稽な話、という意味。「稽［jī］」は「考える」意、「無稽」は「考えるべき根拠がない」意。『書経（尚書）』「大禹謨」に「無稽之言勿聴」（根拠のない、いい加減な話は、聞いてはならない）とある。「稽［jī］」と「雞［jī］」は同音語であるため、中国語で発音した場合、「無稽之談」（根拠のないデタラメな話）は「無雞之談」（（賃料としての）ニワトリの支払いがない場合の話）という意味にも聞こえる。なお、「稽」字に附された割注「雞」は、中国原本に見える原注である。和刻本は「無稽」に左訓「ワケナシ」（訳なし）を附す。「ワケナシ」は、「わけが分からない」「無茶苦茶だ」という意味。「わけもなし」とも言う。○見機而作［jiàn jī ér zuò］＝タイミングを見計らって、すばやく行動する、という意味。『易経』「繫辞伝下」に「君子見幾而作。不俟終日。」（君子はチャンスを見計らって、すぐに行動する。一日中、ぼんやり待っていたりはしない。（拙訳））とある。これもやはり、「機［jī］」と「雞［jī］」は同音語であるため、中国語で発音した場合、「見機而作」は「見雞而作」（ニワトリを見て、すばやく行動した）という意味にも聞こえる。「機」字に附された割注「雞」も、中国原本に見える原注であり、和刻本の施訓者・遠山荷塘による訳注ではない。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』などには収録されていないが、清代筆記小説『堅瓠十集』巻四「攬田」（褚人穫著、康熙二九年（一六九〇）序）に類話がある（祁連休『中国民間故事史（巻下）』（河北教育出版社、二〇一三年一月、一〇七二頁参照）。

以下に示す『堅瓠十集』の引用は、Webサイト「中國哲學書電子化計劃」提供の公開画像データ（原白文）による翻刻である。句読点は、私に附した。

『笑林広記』と内容は同じだが、文章は異なる。拙訳を添える。

『堅瓠十集』（褚人穫著、康熙二九年（一六九〇）序、巻四、二八丁裏）

攬田

崇明佃戸攬田。先以雞鴨送業主。此通例也。有張三者向施氏攬田。施曰。此田不與張三種。既而張三取雞餽之。施轉語曰。不

マとした笑話ならば、次の「術業部」に入れられるはずだからである。「訳解笑林広記目次」「術業部」（一丁表）にも「郎中画工做工ナトノ差過タル可笑コトヲコヽニアツム」（「術業部」には、医者や画家や職人など、手に職を持つ人たちの笑い話を収録する）と説明されている。

亡くなった人が死後お金に困らないようにという願いを込めて、今でも中国の葬式で燃やされることのある「紙銭」ならぬ「紙牌」（中国式カードゲーム）を燃やし、そのカードに描かれている『水滸伝』の英雄たちの働きによって、腹のなかの銀を外へ追い出そうとする藪医者も、もちろんとんでもなく馬鹿げた存在ではあるが、そのような馬鹿げた医者の治療を受ける、とんでもなく馬鹿げた金持ち、いやいや、そもそもこの金持ちは、銀を口に含んでいったい何をしていたのか。常識では考えられないようなことをしていた馬鹿な金持ちが、常識では考えられないような見立てをする馬鹿な医者の治療を受けたという、とんでもなく馬鹿げた世界を、ここでは笑っているということであろう。

この話は、あまりにも馬鹿げた「金持ちたち」の失敗（銀の誤飲事件）を全体的に嘲笑していると考えておく。

⑬田主見鶏（地主様がニワトリを見て……）

原文

田主見雞

一富人有餘田数畝。租與張三者種。毎畝索雞一隻。張三将雞藏于背後。田主遂作吟哦之聲曰。此田不與張三種。張三忽将雞献出。田主又吟曰。不與張三却與誰。張三曰。初間不與我。淡又與我何也。田主曰。初乃無稽［雞］之談。後乃見機而作也。

書き下し文

田主鶏を見る

一富翁余田数畝有り。張三なる者に租与して種せしむ。毎畝鶏一隻を索む。張三鶏を将て背後に蔵す。田主遂に吟哦の声を作して曰く。此の田張三に与て種せしめず。張三忙く鶏を将て献出す。田主又吟じて曰く。張三に与へずして却て誰に与ん。張三曰く。初間は我に与へず。後は又我に与ふは何ぞや。田主曰く。初は乃ち無稽［鶏］の談なり。後は乃ち機［鶏］を見て作すなり。

現代語訳

あるお金持ち、いくらか余分に田畑を所有していたので、（小作人の）誰かさんに貸して、（作物を）作らせようとした。（地主は賃料として、田畑の面積）一畝（五・四アール）ごとに、ニワトリ一羽を要求したが、その誰かさんは、ニワトリを背中の後ろに隠し（て、地主に渡そうとしなかっ）た。そこで地主は、リズミカルな節をつけて、次のように言った。

「この田畑、誰それ君には、植えさせない（此田不与張三種）。」

すると、この誰かさんは、慌ててニワトリを差し出した。すると地主は、またしてもリズミカルな節をつけて、こう言った。

「この田畑、誰それ君に貸さずして、いったい誰に貸すものぞ（不与張三却与誰）。」

誰かさんは、言った。

「最初わしにはやらんと言っておきながら、後になってまたわしにくれるっちゅうのは、いったいどういうわけなんじゃ。」

地主は言った。

「最初はつまり、根も葉もない、そして鶏もないデタラメじゃった。」

【訳者注】中国語では、「稽［jī］と「鶏［jī］」が同じ発音のため、「荒唐無稽なデタラメな話」という意味の成語「無稽之談［wú jī zhī tán］」が「ニワトリがいないときの話」（「無鶏之談［wú jī zhī tán］）という意味にも聞こえる。

「ということで、後のはな、機を見て鶏を見て、そしてすばやく行動したということじゃ。」

【訳者注】同じく中国語では、「機［jī］」と「鶏［jī］」が同音のため、「タイミングを見計らってすばやく行動する」という意味の「見機而作［jiàn jī ér

牌中寫梁山泊強盗宋江等]

書き下し文

銀の肚に入しを医す

一富翁 銀を口に啗む。誤て呑て腹に入る 痛み甚し。医を延き之を治す。医 曰く。難からず。先づ 紙牌一副を買ひ。焼き 灰にして之を咽み。再び 艾丸を用ひて臍を灸す。其の銀 自ら出ん。翁 其の故を詢ふ。医 曰く。外面は 火を用て焼き。裏面は 強盗 有つて打劫す。那ぞ怕ん 你的銀子 出来らざるを。[紙牌中 梁山泊の強盗 宋江等を写す]

現代語訳

あるお金持ちの爺さん、（どういうわけか）銀を口に入れていたところ、誤ってゴクンと飲み込んでしまい、（銀の塊が）お腹に入って、たいそう痛がっていた。そこで、医者を呼んで、治療してもらった。医者が言うには、

「こりゃ大丈夫ですよ。まず、紙牌（中国式トランプ）を一セット買い、それを焼いて灰にして、まるごとゴックンと飲み込んでください。それから、モグサで臍のあたりに灸を据えてごらんなさい。銀はポロンと自然に（お腹から）出てきますよ。」

爺さんは、それはいったいどういうことかと質問した。すると医者は、こう言った。

「外側を火で焼かれ、内側から強盗が襲ってきたら、そりゃどうあっても、銀は出てこないわけにはいかないでしょう。」

【訳者注】この医者は、どうかしている。「そんなアホな」とツッコミを入れるべきところである。中国伝統のお葬式で焼かれる「紙銭」でもあるまいし、「紙牌」（ゲーム用のカード）を焼いて、その灰を飲み込んだからといって、トランプに描かれた盗賊たちが、金目のものを狙ってお腹のなかで暴れ回るなど、二五〇年前の中国の話とはいえ、荒唐無稽も甚だしい。

【和刻本割注】中国式カードゲームの札には、（『水滸伝』に登場する）宋江など、梁山泊の盗賊たちの姿が描かれている。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（一二二丁裏～一二三丁表）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第五八話、一三丁表）。○醫銀入肚［yī yín rù dù］＝銀がお腹に入った人を治療する。「肚［dù］」は「お腹」のこと。現代中国語「肚子［dùzi］」と同じ。○啗［hán］＝口をふさぐ。ふくむ。「含［hán］」と同じ。○延醫［yán yī］＝医者を呼びにやる。「延［yán］」は「招聘する」「招く」「呼びにやる」意の動詞。「醫［yī］」は「醫（医）」の異体字。「醫」は「医」の本字。○紙牌［zhǐpái］＝ゲーム用のカードのこと。ここでは『水滸伝』の人物が描かれた「水滸牌［shuǐhǔ pái］」を指す。右傍訓「カルタフダ」（骨牌札）。中国式カードゲームの札に、『水滸伝』に描かれた梁山泊の盗賊たち、特にその親分であった宋江などの姿が描かれていたことについては、遠山荷塘による和刻本の割注にも指摘されている。○一副［yí fù］＝一セット。「副［fù］」は、一揃いになったものを数える助数詞（量詞）。○艾丸［àiwán］＝もぐさ。ヨモギの葉の裏にある繊毛を乾燥させ、揉んで丸めたもの。お灸の材料。左訓「モクサ」（もぐさ）。○灸臍［jiǔ qí］＝臍に灸を据える、という意味。○裏面［lǐmiàn］＝中。内部。内側。「外面［wàimiàn］」の対義語。日本語の「うらめん」ではない。現代中国語「里面」と同じ。○那怕［nǎ pà］＝直訳は「どうして～を恐れようか（恐れる必要はない）」。現代中国語「哪［nǎ］（どうして、どんな、どの）」は、近代以前の中国では「那」と表記された。左訓「キツカヒセン」（気遣いせん）。左訓「気遣いせん」は、「（銀が出てこないなどという）心配はいらない」意。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

この話は、普通に読めば、とんでもない藪医者の見立て違いを笑い飛ばそうとしているように思えるが、「古艶部（古風で品があり、色鮮やかで美しい世界の話、つまり官吏や役人、富貴な身分の人々の笑い話を集めた部門、の意）」に分類されていることから考えると、『笑林広記』の編者「遊戯主人」の意識としては、特権階級に属する「金持ちたち」を馬鹿にした話として、ここに収録したものであろう。医者をテー

乳ー餅ノ大ナルヲ的ナラン」（是乳餅の大なるを吃する的ならん）は誤り。「大きな乳餅」の意味ならば「大乳餅」と表現される。正しくは「是吃シテ乳餅ヲ大キクナリシ的ナラン」（是乳餅を吃して大きくなりし的ならん）とでも訓むべきであろう。「是～的」は「～なのです」という意味の強調構文。現代中国語と同じ。

補注

この話は、『絶纓三笑』巻二時笑・調語三〇（第二七五話「乳餅」）に類話がある。『絶纓三笑』収録話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』とほぼ同文のため、編者のコメント部分のみ拙訳を添える。

なお、『絶纓三笑』のコメントに紹介されている話は、『笑府』第三話「麟」（巻一古艶部、筑波大学中央図書館蔵本、二丁表～裏）と同じ話であるが、字句は異なる。

『絶纓三笑』第二七五話（巻二、時笑・調語三〇、万暦四四年（一六一六）序、東京大学文学部蔵本、一五丁裏）

乳餅

財主與人論及童子。多肖乳母。爲飲其乳。氣相感也。其人謂財主曰。足下想是吃乳餅大的。凡言財主。便覺牛氣逼人。舊言孔子泣麟。弟子編錢于牛體。以麟活告。孔子觀之曰。分明一隻牛。只多幾箇錢耳。

（編者のコメント）だいたい金持ちというものは、傲慢で偉そうな態度（「牛氣」）で人に接しがちである。昔の話に次のようなものがある。孔子が（死んだ）麒麟を見て泣いていたので、弟子たちは牛の体にお金をぐるぐる巻きにくくりつけ、「麒麟が生き返りました」と孔子に知らせた。孔子はそれを見て、「それは明らかに牛じゃないか。ただ、いくらかお金が余計にくっついているだけじゃ。」と言った。

余説

この話の前半はすべて、「牛気［niúqì］」という語を引き出すための「前振り」である。言いたいことは、金持ちという奴は、傲慢で偉そうな「牛気［niúqì］」に満ちた存在である、ということである。

第七〇話「借牛」では、文字の読めない金持ちが、そうとは知らずに自分で「牛」の代わりに仕事をすると言ってしまい、本話「吃乳餅」においては、金持ちは「牛」の乳で育ったから、「牛」の「気」が充ち満ちて、「牛気［niúqì］」＝「傲慢で偉そうな態度をとる人間」になったのだと言っている。

「牛気［niúqì］」という中国語を知っていれば、そして当時の中国人ならば誰でも知っていたに違いない通俗的な口語語彙なのだが、この二人のやりとりは、まさしく「謎かけ」や「小咄」のように聞こえたことであろう。

「子どもが乳母に似るのは、そのお乳を飲んだせいであり、体内の気が互いに反応したからである」とかけて、「それならば、あなたはきっとチーズをいっぱい食べて育ったのでしょう。」と解く。その意は、「牛の乳を飲んで育って、牛君の気が充ち満ちて、ついには牛気［niúqì］＝傲慢ちきなお金持ちになりました。」ということである。

『笑林広記』本文は、「牛氣」という語を表に出してはいないが、出していないからこそ、謎が解けた後に「氣相感也」の「氣」が「牛氣」という語を引き出すための伏線であったことに気づき、笑いが込み上げてくる、という仕組みになっている。『絶纓三笑』編者のコメント「だいたい金持ちというものは、傲慢で偉そうな態度（「牛氣」）で人に接するものである。（凡言財主。便覺牛氣逼人。）」は、この話の「笑いのツボ」が「牛氣」という語にあることを指摘したものである。

⑫医銀入肚（銀がお腹のなかに入ってしまったのを治療する）

原文

醫ス銀ノ入レ肚ニ

一富翁啗ム銀ヲ于口ニ。誤テ呑テ入レ腹ニ痛甚シ。延レ醫ヲ治スル之ヲ。醫曰ク。不レ難カラ。先ツ買ヒ紙ー牌一副ヲ。焼キ灰ニシテ咽レ之ヲ。再ヒ用ヒテ艾丸ヲ灸レ臍ヲ。其ノ銀自ラ出ン。翁詢フ其ノ故ヲ。醫曰ク。外面ハ用レ火ヲ焼キ。裏ー面ハ有ツテ強盗ー打ー刼ス。那ソ怕ン你ー的ノ銀子不ルヲ出テ来ラ。［紙

年（一八二四）刊、一四丁裏～一五丁表）にも、文言風の漢文体に書き換えられた本文が掲載されているが、『笑林広記』所収の本話「借牛」とは、異なる内容である。

余説

大金持ちではあっても、文字が読めない無教養な人間をからかった話。

この話の場合、文字の読めない金持ちが、「牛を貸してくれ」という申し出に対して、「後ですぐに、（牛の代わりに）わしが行く」と、図らずも即答してしまったところに「笑いのツボ」がある。教養のないただの金持ちは、もはや一人前の人間ではなく、逆に人間様にこき使われ、単純肉体重労働にのみ従事するのが適当な、「牛馬」にすぎない、と言っているのである。

そして、無教養な金持ちを「牛」に喩えて馬鹿にする話は、さらに第七一話「吃乳餅」に続く。

⑪吃乳餅（牛のチーズを食べる）

原文

吃二乳餅一［以二牛羊乳一做ス的］

富一翁 與レ人論一及ス 童子多クハ肖二タリ乳母一。為メニ吃二スルカ其乳一ヲ。氣相感ル也ト也。其ノ人謂二テ富翁一曰ク。若シ是レ如クナラハ此ノ。想来 足下従レ幼是吃二スル乳一餅ノ大ナルヲ的ナラン。

書き下し文

乳餅を吃す［牛羊乳を以て做す的］

富翁 人と論及す 童子 多くは乳母に肖たり。其の乳を吃するが為に。気 相感ずるなりと。其の人 富翁に謂て曰く。若し是 此の如くならば。想来 足下 幼より 是 乳餅の大なるを吃する的ならん。

現代語訳

お金持ちが、ある人と次のような議論をしていた。

「子どもというのは、たいてい乳母に似るものだな。乳母の乳を飲んでいるので、（乳母と子どもは）体内の気が、互いに反応し合っているのじゃろう。」

すると、相手は、お金持ちにこう言った。

「もしもそういうことであるならば、貴殿はきっと、幼い頃からチーズを食べて大きくなったということですな。」

【訳者注】だからあなたは「牛」に似て、「牛」の「気」＝「牛気［niúqì］」に充ち満ちた、傲慢で偉そうな、嫌な人間になったのでしょう、という意味。「牛気」は、「生意気である」「傲慢である」という意味の中国語（俗語）。

【和刻本割注】（「乳餅」とは）牛や羊の乳で作ったものである。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（二二丁裏）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第五五話、一二丁裏）。○乳餅［rǔbǐng］＝牛や羊の乳で作ったチーズ。「餅［bǐng］」とは、通常は小麦粉をこねたものを焼いたり蒸したりして食べる、パンやピザのようなものを指すが、ここでは円盤状に伸ばしたチーズなどの乳製品。和刻本の割注に、「以二牛羊乳一ヲ做ス的（牛や羊の乳で作ったもの）」という遠山荷塘による訳注が附されている。○氣相感［qì xiāng gǎn］＝人間の体内に宿るエネルギー（東洋哲学における「気」）が互いに反応し共鳴すること。「気」と「気」が「化学反応」を起こし、相乗効果をもたらすこと。『易経』「乾」（文言伝）に「同聲相應、同氣相求。（同声相応じ、同気相求む）」とあるのが、日本でも中国でも最も有名だが、黄石公『素書』安礼章第六にも「同聲相應、同氣相感。（同声相応じ、同気相感ず）」とある。なお、後者の本文は、和刻本『素書』（寛永刊本（二八丁裏）、「和刻本諸子大成」第四輯、長澤規矩也編、古典研究会、一九七五年、四八頁）によれば、「声を同じふするものは相應じ。氣を同じふするものは相感ず。」と訓読されている。○若是［ruòshì］＝「もしも（～ならば）」という意味の接続詞（書面語）。現代中国語（口頭語）の「如果［rúguǒ］」「要是［yàoshi］」と同じ。○想来［xiǎnglái］＝考えてみれば、おそらく、たぶん。現代中国語と同じ。右傍訓「オモフニ」（思ふに）。○足下［zúxià］＝貴殿、足下。相手に対する敬意を込めた二人称（書簡用語）。○是吃乳餅大的［shì chī rǔbǐng dà de］＝（牛の乳で作られた）チーズを食べて大きくなったのでしょう。現代中国語ならば「你是吃乳餅長大的」とでも言うべきところ。厳密に言えば、和刻本の施訓「是吃スル

『笑倒』（康熙五七年（一六五八）序『増訂一夕話新集』所収、『明清笑話四種』「笑倒選」第二話、九一頁）

借牛

有走柬借牛於富翁者。富翁方對客，諱不識字，僞啓緘視之，對曰，知道了，少停我自來也。

【訳者注】『明清笑話集六種』（張亜新・程小銘 校注、中州古籍出版社、二〇一二年一〇月、一七九頁）所収テクストは、文末の一字「也」を欠く。

『増補一夕話（増訂一夕話新集）』巻四「笑倒類」第二話（咄咄夫偶拈、道光十二年（一八三二）大經堂刊、架蔵本、一丁表～裏）

借牛　有走柬借牛于富翁者　富翁方対客　諱不識字　佯開緘以視之　対曰　知道了　少刻我即來也

また、この話は、和刻本『解顔新話』（寛政六年（一七九四）序）にも収録され、小咄本『即当笑合』（寛政八年（一七九六）序）には、その日本語訳が「江戸小咄」として、板木を再利用する形で、そのまま掲載されている。

『解顔新話』『即当笑合』の原文を、京都大学附属図書館蔵本に拠って示す。

和刻本『解顔新話』第一九話「借牛」（寛政六年（一七九四）序、京都大学附属図書館蔵本、上巻、一四丁裏～一五丁表）

借牛

有走尺素借牛于富翁者　翁方對客諱不識字　偽啓緘視之對曰　知道了　少刻我自去也

小咄本『即当笑合』第三七話「借牛」（寛政八年（一七九六）序、京都大学附属図書館蔵本、巻二、一四丁裏～一五丁表）

借牛

尺素を走て富翁に牛を借る　翁客のまへで字を識ぬといふ事が諱だから偽緘を啓て見て使来に知道少刻自去

『解顔新話』の本文は、『新鐫笑林広記』と二箇所だけ異なる。原文「柬」を「尺素」に作り、原文「少刻我自来也」を「少刻我自去也」としている。

「柬［jiǎn］」「尺素［chǐsù］」「尺牘［chǐdú］」、いずれも手紙、書簡、文書、尺牘の意。ただし、原文は『絶纓三笑』『笑府』『新鐫笑林広記』、すべて「柬」と書かれている。

原文「少刻我自来也」と『解顔新話』「少刻我自去也」は、日本語に訳せば「ちょっとあとで、わしが自分で行くわい。」と同じ意味のようになってしまうが、この場合「行く」に「来［lái］」を使うのが中国語らしい表現である。日本語では、相手のところに「行く」としか言わないが、中国語では相手のいる場所を起点として、あなたの方に「来る（来）」という言い方をする場合がある。『解顔新話』の作者は、日本語的感性に基づき、原文「来（来る）」を「去（行く）」に書き替えたのであろう。

また、『解顔新話』の和文訳の部分に「翁客のまへで」とある「客」は、原文のままの表記を残して置いたが、本来「客」とでもあるべきところであろう。『噺本大系』第十九巻に見える『即当笑合』（一二頁）も「客」と翻刻し、「客」と読むべきことを示唆している。詳細は、拙稿「『解顔新話』全注釈」（平成二一年度～平成二三年度 科学研究費補助金 成果報告書「中国笑話集と日本文学・日本語との関連に関する研究」課題番号二一五二〇二一五、五二～五四頁）を参照されたい。

なお、『笑府』第二話「借牛」の注に類話として紹介されている話（文字の読めない金持ちが契約書を逆さまに見ているのを指摘され、お前に見せてやっているのだと弁解する話）は、和刻本『笑府』第一五九話（半紙本、明和五年（一七六八）九月刊、下巻、一四丁表）、和刻本『笑府』第一話「索債」（小本、明和五年（一七六八）十月刊、四丁裏～五丁表）に収録され、津阪東陽著『訳準笑話』第七四話（大本、文政七

する」意の動詞。転じて「手紙」「書簡」の意にも用いられる。○来使［láishǐ］＝使者、使いの者。左訓「ツカイ」（使い）。○知道了［zhīdào le］＝分かりました、という意味。現代中国語と同じ。左訓「シヤウチシタ」（承知した）。○少刻［shǎokè］＝しばらく、しばし。少しの時間。『笑府』所収話は「少停」（しばらくして）、『絶纓三笑』所収話は「明日」に作る。左訓「ヲシツケ」（押しつけ）。「押しつけ」は「そのうち」「間もなく」「すぐに」という意味の近世語。「追付」とも言う（補注『解顔新話』参照）。○我自来也［wǒ zì lái yě］＝私が自ら行きます、という意味。左訓「サンジヤウイタサン」（参上致さん）。

補注

この話は、『絶纓三笑』巻二時笑・舛語一六（第一〇六話「借牛」）、『笑府』巻一古艶部（第二話「借牛」）、『笑倒』「借牛」に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』（岩波文庫、一九八三年一月、一二～一四頁）を参照。『絶纓三笑』には拙訳を添える。

なお、清・陳皋謨編『笑倒』は、『増訂一夕話新集』（康熙五七年（一六五八）序）第三巻所収の笑話集のようだが（原本未見）、『笑倒（全）』とする中国古典文学大系59『歴代笑話選』（松枝茂夫訳、平凡社、一九七〇年五月）に「借牛」という話は収録されておらず、王利器輯録『歴代笑話集』（上海古典文学出版社、一九五六年）にも、なぜか「借牛」は見えない。

『絶纓三笑』『笑府』『笑倒』の原文は、以下の通りである。『絶纓三笑』は東京大学文学部蔵本（原刊本）、『笑府』は筑波大学中央図書館蔵本（原刊本）、『笑倒』は周啓明（周作人）校訂『明清笑話四種』（人民文学出版社、一九五八年、九一頁）および『明清笑話集六種』（張亜新・程小銘 校注、中州古籍出版社、二〇一二年一〇月、一七九頁）所収のテクストに拠る。

また、『増補一夕話』（封面には「増訂一夕話新集」とある）（咄咄夫偶拈、道光一二年（一八三二）大經堂刊、架蔵本、巻四・一丁表～裏）にも「笑倒類」第二話に「借牛」が見えるので、その本文も、ここに併せて掲載しておく。

『笑林広記』本文は、『笑府』および『笑倒』所収テクストと、ほぼ同文である。

『絶纓三笑』第一〇六話（巻二、時笑・舛語一六、万暦四四年（一六一六）序、東京大学文学部蔵本、九丁表～裏）

借牛

富翁不識字。方宴客。有親戚投東借牛耕種者。富翁拆柬一看。懵然不知爲何物。權荅其使曰。有客在。不寫回書。明日我自來罷。好箇認狀。可謂直下承當。不煩轉念。

牛を借りる

金持ちだが字が読めない。ちょうどお客さんに御馳走を振る舞っていると、親戚の者が書面で牛を借りて畑を耕し種を蒔きたいと言ってきた。金持ちは手紙を開封し、中身をザーッと見てみたが、何が書いてあるのかさっぱり分からないので、使いの者に、適当にこう言っておいた。

「お客さんが来ているので、返事は書けんが、明日わしが自分で行ってやるわい。」

（編者のコメント）みごとに契約成立である。その場で直に（この人は、牛がやるべき農作業を立派に）引き受けたと言える。思い直す必要もなかろう。

『笑府』第二話（巻一古艶部、泰昌元年（一六二〇）頃成立か、筑波大学中央図書館蔵本、一丁裏～二丁表）

借牛

有走柬借牛于富翁者。富翁方對客。詣不識字。偽啟緘視之。對來使曰。知道了。少停我自來也。雖不識字。却已暗合。

余所識一富翁。向人索債。倒持契書。其人笑之。翁怒曰。吾持與汝看。豈自看耶。又方對客。適鄰家致柬。翁展視客知其貿々。故問之。翁曰。請我吃酒耳。使者曰。非也。乃告借銅鑼銅皷一用。翁笑曰。借銅鑼銅皷。難道不請我吃酒。人更服其機敏。

【訳者注】挨拶状には「春生」ではなく「眷生」と書かれていたのだが、この書生は教養がないために、「春生」と読み間違えたのである。「眷生」とは、相手と姻戚関係にある場合に、目下の人に対して用いる自称。季節の「春」とは、もちろん何の関係もない。

（編者のコメント）ある国子監の学生は、互いに挨拶を交わすとき、それぞれ真っ白い挨拶状を持って行った。主人は、どういうことだろうと不思議に思い、「挨拶状には、どうして一字も書かれていないのですか。」と言った。すると、「誰かに書いてもらう手間を省いたのです。（そして同時に、あなたも自分では文字を読めないでしょうから）あなたが誰かに（書かれた文字を）読んでもらう手間を省いたのです。」と言った。この手法を用いれば、「朝か晩か」「春か秋か」などという、余計な取り沙汰をする必要もなかったのである。

『笑府』第四八七話（巻十一謬誤部、泰昌元年（一六二〇）頃成立か、筑波大学中央図書館蔵本、二丁裏）

拜帖

或謂友曰。某人甚是不通。清早來拜我。就寫了晚生。

其友曰。這還差不遠。還有秋間拜客。寫春生的

余説

大金持ちの男も、そばにいた大学生も、いずれも文字の意味を正しく理解していないことを嘲笑った話である。

大金持ちは、「年下の者（晩生）が年上の者に差し出す挨拶状（帖）」＝「晩生帖」を「夜遅く（晩）の挨拶状」であると勘違いし、そばにいた大学生は、「姻戚関係にある人が、目下の人に差し出す挨拶状」＝「眷生帖」を「春の季節の挨拶状（春生帖）」と誤読したというわけである。

経済的にも学歴的にも特権階級に属するはずの人たち（「古艶」）の、無知と無教養を、冷やかしているのである。

ちなみに、「晩婚化」とは「夜おそく（晩）に結婚する人が増えた」という意味ではない。「晩生帖」を「夜おそくの御挨拶」だと思うのは、「晩婚」を「夜遅く結婚する」という意味だと勘違いするのと同じである。

⑳借牛（牛を借りる）

原文

借レ牛ヲ

有リ走レ東ヲ借ル牛ヲ于富翁ニ者ノ。翁方ニ對ス客ニ。諱レ不ルヲ識ラ字ヲ。偽テ啟レ緘ヲ視テ之ヲ。對ニ来使ニ曰ク。知ー道ー了ス。少ー刻我レ自ラ来ラン也。

書き下し文

牛を借る

東を走して牛を富翁に借る者有り。翁方に客に対す。字を識らざるを諱んで。偽て緘を啓て之を視て。来使に対して曰く。知道了す。少刻我自ら来らん。

現代語訳

大金持ちのところへ手紙を送り、牛を借りたいと申し出た者がいた。大金持ちの爺さんは、（そのとき）ちょうど接客中だったため、（お客さんに、自分が）字の読めない人間であることを気取られまいとして、（その場で）手紙を開封し、（ふむふむと手紙の中身を）読んでいるようなふりをした。そして、使いの者にこう言った。

「承知した。しばらくしたら、わしが自分で行ってやるわ。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（二二丁表～裏）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第五二話、一二丁表）。○走東［zǒu jiǎn］＝手紙を送る。「東［jiǎn］」は「書簡」「招待状」「名刺」の意。『笑林広記』の改題本『新増閑談笑記』（光緒七年（一八八一）宝仁堂刊、架蔵本）所収テクストは「寫帖」（巻一、九丁表）に作る。○**啟**緘［qǐ jiān］＝手紙の封を開く。「**啟**［qǐ］」は「啓」の本字。「開く」意の動詞。「緘［jiān］」は「封を

『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』の原文は、以下の通りである。三種のテクストは、それぞれ文字に異同がある。『笑林評』と『絶纓三笑』には、拙訳を添える。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（下）』（岩波文庫、一九八三年二月、一四五～一四六頁）、大木康『笑林・笑賛・笑府他〈歴代笑話〉』（中国古典小説選12、明治書院、二〇〇八年一一月、三七五頁）を参照。

『笑林評』第六三話（内題「笑林評巻之上」、外題「笑林評　上」、国立公文書館（内閣文庫）蔵本、万暦三九年（一六一一）序、二五丁表～裏）

一人不識字。有以眷生帖來拜者。錯認眷爲春字。因向一人曰。此人不識時務。如今秋天。到寫一個春生其人亦不識字。乃曰。你不知道。昨日清蚤辰。有人拜我。到遞一個晩生帖兒。

不識春秋的。不識蚤晩的。一般有人探望

ある男、文字が読めなかった。「眷生帖」（姻戚関係にある目上の人からの挨拶状）を持参して、ある人が御挨拶に来られたとき、「眷」という字を「春」という字と読み間違えてしまった。そこで、もう一人の男に向かって、こう言った。

「この人は、時宜を心得ておられぬなあ。今は秋なのに、『春生』などと書いておるわ。」

その相手も、やはり文字が読めない人間だったので、こう答えた。

「あんたは知らんじゃろうが、昨日の朝早くにな、わしのところに挨拶に来た人がいたんじゃが、なんとも（朝なのに）『晩生帖』（後輩から先輩に送る挨拶状）なんぞを渡しよったぞ。」

（編者のコメント）春か秋かも分からない奴（「眷」「春」の字の区別が付かない文盲の人）、朝か晩かも分からない奴（「晩生帖」の「晩」の意味すら知らない人）、（こんなアホな奴らの家にも）挨拶に来る人が、同じようにいるなんて。

『絶纓三笑』第一四三話（巻二、時笑・舛語五三、万暦四四年（一六一六）序、東京大学文学部蔵本、二九丁裏～三〇丁表）

晩生

有一新進監生。拜在監之老成者。寫一晩生帖而晨往。老成者拒而不納。次日告其友曰。彼欺我不識字。早晨來拜。寫做晩生 其友曰。此何奇秋間來拜我者有寫春生［蓋誤認眷字也］

有監生相拜。持一白帖而往。主人訝曰。帖上何以無一字。曰。我省得央人寫。你省得央人看。操此等法。可無早晩春秋疑義矣。

後輩からの挨拶状

新たに国子監の学生になった男が、かなり歳をとってから学生になった人に向かって挨拶をすることになり、（「先輩に対して後輩からお送りする書状」という意味の）「晩生帖」を書き、朝方（先輩のお宅を）訪問した。ところが、年配の男は、その書状を受け取ろうとはしなかった。

次の日、（年配の男は）友人に向かって言った。

「あいつは、わしが文字を読めないと言って馬鹿にしやがる。朝早く挨拶に来ているくせに、『晩生』などと書いて寄越しやがるんだからな。」

【訳者注】「晩生」とは「後輩」というだけの意味なのだが、この男は「朝早く」やって来た人間が手にするものとしては不適切な「夜おそく」という意味だと思ったのである。

すると、その友人は、こう言った。

「そんなものは別に大したことじゃないぞ。秋頃にわしのところへ挨拶に来た奴なんか、（秋なのに、挨拶状の表には）『春生』なんぞと書いておったぞ。」

【原注】「眷」を「春」と読み間違えたのであろう。

う語の「眷」を「春」と読み間違えたもの。「眷生帖」は、姻戚関係にある両者において、目上の人から目下の人へ送る書付（カード状の用紙）のこと。第七〇話「倣制字」の注（「制生帖」の項）を参照。○財主［cáizhǔ］＝大金持ち、富豪。左訓「カネモチ」（金持ち）。○某人［mǒurén］＝誰それ、○○という人。実名を挙げることができない場合に用いる。○不通文墨［bù tōng wénmò］＝文章を書くことができない、教養がない。左訓「モンモウ」（文盲）。○欠通［qiàntōng］＝本来は「文意が通らない」意。転じて「話が通じない」「融通が利かない」意で用いられるが、今の場合は、「わけが分からない」「意味が分からない」ということであろう。左訓「モンモウ」（文盲）。○清早［qīngzǎo］＝早朝、夜が明けて間もない時間帯。左訓「アサハヤニ」（朝早に）。○拜［bài］＝訪問する、お目に掛かる。「拜」は「拝」と同字。左訓「ミマフ」（見舞ふ）。○晩生帖［wǎnshēng tiě］＝清代中国の官界（官吏の世界）において使用された招待状（「名帖［míngtiě］」）の一つ。自分よりも少しだけ地位の高い相手に送るときに用いられた。「晩生［wǎnshēng］」は「（相手より）おそく生まれた（後輩）」の意。言うまでもなく、この語の「晩」に、「朝晩」の「晩（夜おそく）」という意味はない。「帖」は「書付」（カード状の用紙）のこと。「晩生帖」は、第六五話「監生拜父」に前出。和刻本は「帖」に左訓「テフダ」（手札）を附す。○到［dào］＝逆に、かえって。意外な気持ちを表す副詞。通常は「倒［dào］」と表記する。右傍訓「カヘツテ」（却つて）。○還［hái］＝まだ、なお。現代中国語では「还」と表記される。右傍訓「ナホ」（猶）。○差コト不レ遠カラ＝（本来の意味との）違いは（まだまだそれほど）大きくはない。「差［chà］」は「違っている」意の形容詞。「不遠［bù yuǎn］」は、形容詞の後ろに置かれた様態補語。その違いが「大きくない」ことを表す。現代中国語と同じ。ここでは、「朝」にやって来たくせに「晩生帖」を持ってきたという話は、「秋」にやって来たくせに「春生帖」を持ってきたという話に比べれば、まだズレ具合が小さい、ということ。○好像［hǎoxiàng］＝「ちょうど～のようである」「まるで～のようなものである」という意味の副詞。ただし、ここでは、かなり結びが流れており、「どうやら～みたいな」くらいの軽いニュアンスを添えるものとなっている。いずれも、現代中国語と同じ。左訓「チヤウト」（丁度）。○秋天［qiūtiān］＝秋。現代中国語と同じ。この場合の「天」に「空」という意味はない。左訓「アキソラ」（秋空）。厳密に言えば、和刻本の左訓「アキソラ」は誤訳である。○竟［jìng］＝意外にも、あろうことか。意外性を表す副詞。○寫［xiě］＝書く。「寫」は「寫」の俗字。「寫」は「写」の本字。常用漢字「写」は「寫」の略字である。明清時代の口頭語における「寫」「寫」「写」に、日本語の「うつす」意はない。現代中国語と同じ。○春生帖子＝「春生帖」。「帖子」は「帖」（カード状の用紙）と同じ。「子」は、名詞の語尾に附される接尾辞。○［眷字誤看春字］（割注）＝「眷」という字を「春」という字に見間違えたのである、という意味。この割注は、中国原本に存する原注である。○哩［li］＝文末の語気助詞（方言語彙）。現代中国語「呢［ne］」に近い。「～だね」「～だよ」などの語気を添える。右傍訓「（～スル者 有リシ」には、和刻本の施訓者・遠山荷塘による工夫が感じられる。なお、和刻本は「哩」字の一字上、「的」字の横に読点「、」を附すが、今、中国原本に従い、「哩」字の後に点を附した。

補注

この話は、明末清初に刊行された中国笑話集『笑林評』（第六三話）、『絶纓三笑』巻二時笑・舛語五三（第一四三話「晩生」）、『笑府』巻十一謬誤部（第四八七話「拜帖」）に類話がある。和刻本『笑府』に類話はない。

『笑林評』は、明・楊茂謙輯、万暦三九年（一六一一）序の中国笑話集であり、国立公文書館（内閣文庫）にのみ完全な原刊本が現存する中国明代の笑話集である。収録話数は、全七五七話。『絶纓三笑』所収の七二六話（＋類話）、『笑府』所収の六〇〇話（＋類話）、『笑林広記』所収の八二七話に匹敵する、壮大な分量を誇る中国笑話集であるにも関わらず、現在までほとんど調査されたことのないテクストである。台湾の中国古典文学研究者である王國良氏による論稿「介乎雅俗之間―明清笑話書『笑林評』、『笑府』與『笑林廣記』」（『第一屆通俗文學與雅正文學全國學術研討會論文集』、國立中興大學中國文學系 主編、臺北、新文豐出版、二〇〇一年、二三三～二五〇頁）だけが、唯一の学術的な報告だが、収録話数などの基礎的な調査においてすら、やや不備があるように見受けられる。本注釈においては、国立公文書館（内閣文庫）蔵の原刊本に基づいて正確な本文を提供し、『笑林評』に対する本格的な分析・調査を開始したいと考えている。

生大喜曰、「人不可不學、只一字用得好、他見了便添下多少殷勤。」

余説

「制」という文字が「喪中」であることを示す語であるとも知らずに、自分の手紙に「制生帖」と書いて送りつけ、先方にお悔やみを言われる、という笑い話。しかもさらに、お悔やみを言われていることにすら気が付かず、家族全員の安否を尋ねられるなんて、やっぱり学問はしておくものだと、全くトンチンカンな反応を示しているところも、笑いのポイントであろう。簡単に言ってしまえば、本話は、「制」という文字の意味も知らない書生の無知を笑ったもの、ということである。

この書生、「制」という文字の、字義は知らないくせに、その字形には憧れていた、というのも、考えてみれば不思議な話ではあろう。『絶纓三笑』編者のコメントは、そのことを箴言風に簡潔に、八文字の対句表現（「不識制義。反識制字」）で指摘したものである。相変わらず、なかなか味のある言い回しと言えよう。

⑥⑨春生帖（春の季節の御挨拶）

原文

春生ノ帖

一財主不レ通二文墨一。謂テ友ニ曰ク。某一人ハ甚タ是レ欠一通也。清一早ニ来テ拜スレ我ヲ、就チ寫二晩一生帖ヲ一。傍ノ一監生曰ク。這ハ到還差コト不レ遠カラ。好一像這ノ両一日ノ秋一天ニ拜スルニ客ヲ。竟ニ有リ寫ス春［眷字誤テ看二春字一］生帖子ヲ的上哩、

書き下し文

春生の帖

一財主文墨に通ぜず。友に謂て曰く。某人は甚だ是欠通なり。清早に来て我を拝す、就ち晩生帖を写す。傍の一監生曰く。這は到て還差ふこと遠からず。好像這の両日の秋天に客を拝するに。竟に春［眷字誤て春字と看る］生帖子を写す的有りし、

現代語訳

ある大金持ちの男は、教養のない人間だった。（その男は）友人に言った。

「○○という人は、本当にわけの分からん奴じゃ。朝早くにわしのところへやって来ておきながら、挨拶状に『晩生帖』（夜遅くの御挨拶）などと書いて寄越しやがったのじゃから。」

【訳者注】「晩生帖」とは、目下の人が目上の人に御挨拶に伺うときに持参するカード型の挨拶状のこと。「相手よりも『晩く』『生まれた』人、つまり後輩から先輩へ送る『帖（挨拶状）』」だから「晩生帖」と称する。決して「夜分遅くに」御挨拶に伺うから「晩生帖」と言うのではない。

（それを聞いて）そばにいたもう一人の学生は、こう言った。

「おっと、それはまだまだ大したことではないぞ。だいたい数日前くらいのことじゃ、秋に誰かのところへ訪問するというのに、『春生帖』（春の季節の御挨拶）と書かれた挨拶状を持ってきた奴がおったぞよ（こっちの方が、半年以上も時間がズレているのじゃから、朝と晩との違いより、もっとひどいというもんじゃ）。」

【原注】「眷［juàn］」を「春［chūn］」と見間違えたのである。

【訳者注】姻戚関係にある両者間において、目上の人は「眷生［juàshēng］」と自称し、相手のお宅を訪問する際には、礼儀として「眷生帖［juàshēng tiě］」を持参する。この話に登場する「監生（国子監の学生）」は、そのような常識も教養も持ち合わせていなかったため、「眷生帖」を「春生帖」と見間違え、「秋に人を訪問しているにもかかわらず、『春の季節の挨拶状（春生帖）』を持参するとは何事か」と、実に的外れな、無知丸出しの批判をしてしまったというわけである。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（二二丁表）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第五一話、一一丁裏）。○春生帖［chūn shēng tiě］＝「眷生帖［juàn shēng tiě］」とい

補注

この話は、『絶纓三笑』巻二時笑・舛語八七（第一七七話「眷制生」）、『笑府』巻一古艶部（第一〇話「眷制生」）に類話があり、『笑府』所収話は、和刻本『笑府』（半紙本、明和五年（一七六八）京都刊）に収録されている。

『絶纓三笑』『笑府』および和刻本『笑府』（半紙本、明和五年（一七六八）京都刊）の原文は、以下の通りである。『絶纓三笑』と『笑府』は、ほぼ同文であるため、末尾の編者コメントのみ拙訳を添える。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（上）』（岩波文庫、一九八三年一月、二一一～二二頁）を参照されたい。

『絶纓三笑』第一七七話（巻二、時笑・舛語八七、万暦四四年（一六一六）序、東京大学文学部蔵本、四八丁表～裏）

眷制生

一監生見有投眷制生帖者。深嘆制字新奇。偶致一遠書。即效之。甚得意。僕致書回。生問主人何言。僕曰。一開書。便問老相公無恙乎。對曰。安。又問老奶奶無恙乎。又對曰。安。乃沢吟數四。帶笑而入。少焉打發回書。生大喜曰。人不可不學。只一字用得好他見了便添許多殷勤不識制義。反識制字

（編者のコメント）「制」という文字の（「喪に服する」という）字義は知らないくせに、字形だけは知っていた、ということか。

『笑府』第一〇話（巻一古艶部、泰昌元年（一六二〇）頃成立か、筑波大学中央図書館蔵本、五丁表～裏）

眷制生

一監生見有投眷制生帖者。深嘆制字新奇。偶致一遠札。即效之甚得意。僕致書回。生問主人何言。僕曰。當面啟看。便問老相公無恙乎。予對曰安。又問老妳妳無恙乎。予又曰安。乃沢吟數四。帶笑而入。少焉打發回書。遣我歸耳。生大喜曰。人不可不學。只一字用得好。他見了。便添下多少慇勤

張幼于先生。曾言凡喪服長短。皆王制也。一切朞功皆可用制字。不獨親喪為然。近亦頗有寫朞制者。只問老相公老妳丶。反是他差

和刻本『笑府』第九〇話（半紙本、明和五年（一七六八）京都刊、京都大学附属図書館蔵本、巻下、一丁表）

一監生見レ有ル下投二眷制生帖一ヲ者上　深ク嘆二制字ノ新奇ヲ一　偶ク致ス二一遠札一ヲ　即效レ之甚得一意　僕致レ書ヲ回ル　生問フ主一人何ヲ言フ　僕曰　當面啓キ看　便チ問老相公無レ恙乎　予對テ曰　安シ　又問老妳々無レ恙乎　予又曰　安シ　乃沢吟　數四　帶レ笑ヲ而入少ク焉打發回書ヲ一　遣ルニ我歸一耳　生大ニ喜テ曰　人不レ可レ不レ學ハ只一字用得テ好シ　他見了便添ニ一下ス多少ノ慇懃ヲ一

また、この話は、『広笑府』巻一（第四三話「倣制字」）にも収録されている。ただし、『広笑府』は、明末・馮夢龍の撰ではなく、一九三三年以降に成立した偽書であることが判明しているが（馮学「『広笑府』質疑二題」（『笑府選』（竹君 校点、海峡文芸出版社、一九八七年一一月、二五五～二六三頁））、参考までに、『広笑府』収録話の原文を以下に掲げる。『広笑府』の引用は、『馮夢龍全集（第十巻）』（魏同賢 主編、鳳凰出版伝媒集団 鳳凰出版社、二〇〇七年九月、一四頁）所収テクストに拠り、文字および句読点は、日本語通用の書式に改めた。

『廣笑府』第四三話（巻一、儒箴）

倣制字

一監生見有投眷制生帖者、深嘆「制」字新奇。偶致一遠札、即效之、甚得意。僕致書回生、問主人何言、僕曰、「當面啓看、便問老相公無恙乎。予對曰安。又問老奶奶無恙乎。予又曰安。乃沢吟數四、帶笑而入、少焉打發回書、遣我歸耳。」

後、やっと御返事を頂いたというわけでございます。」

書生はたいそう喜んで、こう言った。

「人間というものは、（やっぱり）勉強しておかなければならないもんじゃ。ただ一語の使い方が違うだけで、家族全員の安否を尋ねられ、丁重極まる御挨拶を頂くことになるのじゃから。」

【和刻本割注】一般に、父母の喪に服しているときに誰かに手紙を送る場合、（自分のことを）「制生［zhìshēng］」と称する。

【訳者注】「制」という字は、父母の喪に服していることを示す。つまり「制生帖」とは「父母が亡くなり、喪に服している私が、先方にお送りする手紙」という意味だが、当の書生はその意味を知らなかったのである。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・古艶部（二二丁表～裏）。『新鐫笑林広記』巻之一・古艶部（第五〇話、一一丁裏）。○倣制字［fǎng zhì zì］＝「制」という字を真似る、という意味。「倣［fǎng］」は「真似る」「模倣する」意の動詞。『新刻笑林広記』（書業堂刊本ほか）は「做」に作るが、今、現存最古の最良本、乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊本（京都大学附属図書館谷村文庫蔵）に従う。和刻本『訳解笑林広記』は、「倣」「做」「傚」のいずれの形にも見えるように刻している。○制生帖［zhìshēng tiě］＝『笑府』『絶纓三笑』所収テクストは「眷制生帖」に作る。「眷生［juànshēng］」は、姻戚関係にある両者の間において目上の人が用いる自称。「制［zhì］」は、父母が亡くなり、服喪中であることを示す語。「帖［tiě］」は、名前などを記した書付（カード状の用紙）のこと。○致二一ノ遠-札一ヲ＝遠くへ手紙を出す。「遠札［yuǎnzhá］」は「遠方へ送る手紙・書簡」のこと。『絶纓三笑』は「遠書」に作る。左訓「ヱンホウニジヤウヲヤル」（遠方に状を遣る）。○僕致レ書ヲ囘レ生二。問ヲ＝和刻本は句読を誤る。『笑府』は「僕致書回。生問」、『絶纓三笑』は「僕致書回。生問」となっており、今この句読に従う。「囘」「回」は、「回」の異体字。なお、乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊『新鐫笑林広記』（京都大学附属図書館谷村文庫蔵）は、和刻本と同様に「僕致書回生。問」としているが、本テクストがこのように句読を切り誤るのは、極めて珍しいことである。○當面［dāngmiàn］＝面と向かって。現代中国語と同じ。左訓「メノマヘデ」（目の前で）。○老相公［lǎo xiànggōng］＝上流社会における、年配の男性に対する尊称。「相公［xiànggōng］」は「若旦那」「旦那さま」の意（第八話「楊相公」の語注を参照）。左訓「オホダンナ」（大旦那）。○老安［lǎoān］＝「老相公」（大旦那さま）に対する女性の呼称（大奥さま）と思われるが、未詳。『笑府』は「老妳妳」、『絶纓三笑』は「老奶奶」に作る。「妳」は「奶」の異体字。「老奶奶［lǎonǎinai］」ならば、年老いた女性に対する尊称（お婆さま）として一般的な表現。左訓「オクサマ」（奥さま）。○沈吟半晌［chényín bànshǎng］＝しばらく黙って考え込む。「半晌［bànshǎng］」は、「しばらくの間」という意味の時量表現。現代中国語と同じ。ただし、中国原本（乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊本（京都大学附属図書館谷村文庫蔵）及び「新刻」本）は「半响」と誤刻している。「响［xiǎng］」は、字形も発音も似ているが、「響」の異体字であり、全く語義が異なる。和刻本の施訓者・遠山荷塘が正字に修正したのであろう。○笑テ而入ル＝中国原本は「帯笑而入」に作る。これが正しい本文であろう。本注釈の「原文」には、和刻本の表記を保存しておいたが、「書き下し文」には、中国原本の本文に基づいた訓読（笑ひを帯て入る）を示しておいた。「帯笑［dài xiào］」は、顔に笑みを浮かべること。「笑而入」よりも「帯笑而入」の方が、中国語として語調がよい。○纔［cái］＝「～してはじめて」「～してやっと」という意味の副詞。現代中国語「才」と同じ。右傍訓「ソコデ」。○用得着當［yòng de zháo dàng］＝（一字の）使い方が適切である、という意味であろうが、「着當（着当）」という語については、未詳（「當」は「当」の本字）。現代中国語「恰当［qiàdàng］」（適切である、ちょうどよい）と同じか。文意は、（「制」という、たった一文字の）使い方が違うだけで、その効果は絶大である、ということ。『笑府』は「用得好」、『絶纓三笑』は「用得好」（「得」は「得」の異体字）に作る。「（動詞）＋得＋（様態補語）」は、「（動詞で表される行為の）そのやり方が…である」という意味を表す構文。現代中国語と同じ。左訓「ツカヒアテレハ」（使い当てれば）。○一家倶二問ヒ到リ一＝一家全員の安否を尋ねまわる。左訓「カナイヂウタツネ」（家内中、尋ね）。○添二一下ス許多ノ殷勤一ヲ＝直訳すれば、「非常に多くの丁重さを付け加えた」ということ。ここでは、自分からの書状に「制」という一字が追加されただけで、相手の対応が極めて丁寧になったことを言っている。左訓「イクラカ　テイネイニナル」（幾らか丁寧になる）。ただし、「許多」は、「いくらか」ではなく、厳密には「非常に多くの」という意味。

『訳解笑林広記』全注釈（六）

川上　陽介（工学部教養教育）

序

本稿は、「『訳解笑林広記』全注釈（一）」（『富山県立大学紀要』第二六巻、二〇一六年三月）、「『訳解笑林広記』全注釈（二）」（『富山県立大学紀要』第二七巻、二〇一七年三月）、「『訳解笑林広記』全注釈（三）」（『東アジアの古典文学における笑話』、新葉館出版、二〇一七年一〇月）、「『訳解笑林広記』全注釈（四）」（『富山県立大学紀要』第二八巻、二〇一八年三月）、「『訳解笑林広記』全注釈（五）」（『富山県立大学紀要』第二九巻、二〇一九年三月）の続稿である。前稿に引き続き、遠山荷塘施訓『訳解笑林広記』（文政十二年（一八二七）刊、半紙本二巻二冊、全三〇五話）第六八話から第七九話までの原文・書き下し文・日本語訳・注釈を掲載する。

和刻本『訳解笑林広記』及び中国笑話関連資料の諸本、底本、凡例等については、第一稿を参照して頂きたい。『富山県立大学紀要』所収の論稿は、すべてWebによる閲覧が可能である。

⑥⑧倣制字（「制」という字を真似てみる）

原文

倣二制ノ字一［凡居二父母ノ之服一與ルハ書ヲ于人一則称スル制生一也］

一生　見テ有ルヲ投スル制一生ノ帖ヲ者上。深ク嘆ス制字ノ新奇ナルヲ。偶、致ス一ノ遠一札ヲ。遂ニ効レ之ニ。僕致シテ書ヲ囲ス生ニ。問フ見テ書ヲ有リシ何ノ話説カ。僕曰ク。當一面ニ啟キ看テ。便チ問フ老相公　無キヤ恙カ。又タ問フ老安　人好シヤ否ヤ。予曰ク。俱ニ安也ト。乃チ沈一吟半一晌シテ。笑テ而入ル。纔ニ發ス囲書ヲ。生　大一喜シテ曰ク。人不レ可レ不レ學ハ。只、一字用ヒ得着一當スレハ、便チ一家俱ニ問ヒ到リ。添ニ一下ス許多ノ殷勤ヲ。

書き下し文

制の字を倣ふ［凡そ　父母の服に居りて書を人に与るは　則ち制生と称す］

一生　制生の帖を投ずる者　有るを見て。深く制字の新奇なるを嘆ず。偶たま　一の遠札を致す。遂に之に効ふ。僕　書を致して回る。生　問ふ　書を見て何の話説か有りし。僕　曰く。当面に啓き看て。便ち問ふ　老相公　恙無きや。又　問ふ　老安　人　好んや否や。予　曰く。俱に安なりと。乃ち　沈吟　半晌して。笑ひを帯て入る。纔に回書を発す。生　大喜して曰く。人　学ばざるべからず。只　一字　用ひ得て　着当すれば、便ち　一家　俱に　問ひ到り。許多の殷勤を添下す。

現代語訳

ある書生、（誰かが）「制生帖」と書かれた手紙を送るのを見て、

「ああ。すばらしい。『制』という字が、輝いているようじゃ。」

と、感嘆の声を上げた。

（この書生、あるとき）たまたま遠くへ手紙を送ることになり、ついに（憧れの）「制生帖」を真似て、（「制生帖」と書いた）手紙を送ってしまった。召使いの下僕が手紙を送り届けて帰ってくると、書生はこう尋ねた。

「（相手の人は、あの）手紙を見て、何と言うておった。」

下僕は答えた。

「（相手の人は）私の目の前で手紙を開いてお読みになり、すぐに『大旦那さまは、お変わりございませんか。』とお尋ねになりました。それからまた、『大奥さまは、お元気でいらっしゃいますか。』とお聞きになりましたので、私は、『お二人ともお元気でございます。』とお答えしました。すると、それからしばらくのあいだ、じっと黙っておられ、ついには笑みを浮かべながら、家の中へ入って行かれました。そしてその